

city&life

都市のしくみと暮らし

no.135

Aug. - Nov. 2022



特集

「ほどほど都市」を
実現するために

巻頭言

「曖昧さ」「ゆるさ」を都市に取り込む

新型コロナウイルス感染症の蔓延が長期化するなか、新たな生活様式、新たな社会経済のあり方が模索されている。

city&lifeでは、130号では「コロナ後の都市と暮らし」を、131号および134号では「〈SDGs〉を考える—サステナブルな都市とは—」というテーマで「理論編」と「実践編」という特集を組んだ。これらの特集により、コロナとSDGs、本来、相関関係のなかった世界的なパンデミックと目標が、今、歩調を合わせるかのように、従来の都市、暮らし、そして経済のあり方の根本的な見直しを迫る状況に陥っていることが明確に示された。

「〈SDGs〉を考える—サステナブルな都市とは—」(131号)内のインタビューで、大阪府立大学大学院准教授の武田重昭氏は「ビフォーコロナの都市空間は利用過多であり、過剰に過密に利用されることや経済効果を上げることが優先されてきた」と語った。また同特集内において、本誌企画委員でもある大村謙二郎氏は「(電子機器類の度々のモデルチェンジは)製品の陳腐化の速度をあげているように思える」と指摘した。つまりこのことは、いずれも過剰な経済効果を生まないと、社会や暮らしが維持できないという異常性を表している。

都市の構造、経済の仕組み、消費のあり方など、「ほどほど」でありながらも、みんなが幸せを実感できる都市を実現できないか。そのためには、何を、どうすればいいのだろうか。

地域経済、都市の規模、地域社会に焦点を当て、「ほどほど都市」の実現可能性について、それぞれの識者に対談形式で語り合っていたきながら、都市における曖昧さやゆるさをもつ意味を考える。(編集部)



表紙—東京都豊島区、都電荒川線・大塚駅前停留所
裏表紙—福岡県福岡市、大濠公園
photo:坂本政十賜

特集

「ほどほど都市」を実現するために

contents

インタビュー	「ほどほど都市」への期待 イタリア「テリトリーオ」を参考に 陣内秀信	2
対談①	「地域資本主義」の可能性 平川克美×柳澤大輔	5
対談②	「ほどほど都市」と適正規模 町村敬志×谷口守	14
対談③	「ほどほど都市」の核としてのコミュニティと コモンズ 北山恒×広井良典	22
グラビア	「ほどほど都市」の風景 坂本政十賜	9,10,18,29
連載	都市の緑3表彰 緑がなくな町・人・暮らし① 「SAKURA MACHI Kumamoto」	30
連載	噂の「駅前」探検⑩ 御茶ノ水駅 今尾恵介・小夜小町・坂本政十賜	34
	back number・information	38

「ほどほど都市」への期待

イタリア「テリトリーオ」を参考に

「ほどほど都市」とはどんな都市なのか。近いイメージに「スローシティ」がある。スローシティとは、1999年、イタリアで始まった「スローフード・スローライフ」運動から派生した地域文化顕彰活動で、現在は「スローシティ国際連盟」によって管理運営されており、30カ国278都市が加盟している（2021年7月時点）。またイタリアでは1980年代、都市と、その周辺に広がる田園、農村を文化的なアイデンティティを共有する一体的な空間「テリトリーオ」として捉え、その重要性が見直されるようになった。いわば、これらイタリアにおける地産地消を実現する空間的なスケールは、「ほどほど都市」のヒントになりそうでもある。ただ、「ほどほど」という曖昧な言葉は、そこまで価値の定まっていな「ゆるさ」も許容しそうだ。「ゆるさ」ゆえの間口の広さが、多様性を受け入れ、新たな価値創造につながるのではないか。イタリアのスローシティ、テリトリーオを参考にしながら、都市のなかに「ほどほど」の価値観を見出す方策を考える。

陣内秀信

法政大学特任教授／本誌企画委員

「ほどほど都市」とは？

コロナ禍により、従来の都市のあり方は見直しを迫られています。東京のような大都市は、過密な建築物や早期の建て替えサイクル、過剰な生産と消費など、経済が発展し続けると維持できないという、構造的な異常性を内包しており、私たちはそれに気付きながらも変えようとするきっかけを見失っていました。しかしコロナ禍は私たちに、都市の問題を真剣に考えたり、変えたりするチャンスを与えてくれた。今、都市を見直すにあたり、イタリアから始まったテリトリーオやスローシティなどの取り組みが、参考になると考えています。1980年代、イタリアのポローニャでは、経済原理よりも市民の住みやすさを優先することを目的に、行政が牽引してまちづくり政策を拡大路線からコンパクト化する方

向に切り替えました。この動きは、その後イタリア各地、欧州の都市にも広がります。都市を拡大するのではなく、ほどほどの規模、人口に留めることで、家族経営を基本とする、地産地消の消費による地域経済が成立し、都市の周辺にある田園や景観などの資源を活かした、能動的でクリエイティブな働き方が生まれる。特別ではない平凡な人々の暮らしや町の風景が、世界中の人々を魅了し、ありきたりと思われた田園風景が世界遺産として登録されたり、ツーリズムとして産業になったりしています。これらの都市は、発展がほどほどであるがゆえに輝きを取り戻し、現在も価値を維持することができている。そこに共通するのは、ほどよい経済・人口・暮らし方のバランスが取れた「ほどほど都市」とも呼べる価値観。コロナ後の日本の都市を考え

るうえで、この言葉はとても重要なキーワードであると思います。

東京と欧州の都市の発展の違い

日本も1960年代の高度経済成長期に入るまでは、都市の規模、経済の発展はほどほどであり、家族経営や地産地消で人々の暮らしは支えられ、地域や血縁などのコミュニティのつながりは強く、みんなが支え合いほどほどに幸せに生きてきました。そして1973年のオイルショック後、また地域主義の考え方も広がり、社会が落ち着きました。ところが1980年代後半に入り、バブル期になると状況は一変します。東京は、臨海部埋立地に副都心の開発を進めるなど、都市を拡大する方針を打ち出します。結果的にオフィス都市としての整備は進まなかったものの、経済至上主義で民間のデベロッパーが開発を進め、東京は都市としてバランスを失ったまま発展。その体質は現在も変わっていません。効率や機能が重視され、際限ない競争が起きています。

東京の発展は世界の先進国とは真逆の方向で進んできたといえます。先述のポローニャのコンパクト化を皮切りに、イタリア各地やヨーロッパの都市

では、地産地消やコンパクトシティへのビジョンが明確に志向され、行政が中心となり、まちづくりが体系的に進められてきました。地方の中小都市は、都市と周辺の農村や田園地域の暮らし、建築、文化などを再評価し、テリトリーオと呼ぶようになります。農村や田園地域にも光が当たり、ルーラル・ツーリズムも展開。近代化・工業化の弊害を乗り越え、ほどよい経済・人口・暮らし方のバランスが回復されてきたわけです。テリトリーオという価値観は、かつて地域社会が共有していたアイデンティティを回復させ、新しい意味を加え、複数の自治体が共通のアイデンティティをもつことで注目を集め、自分たちも活性する新しいグルーピングを成し遂げたのです。

その後、1999年にはイタリアでスローシティという概念が生まれました。スローシティとは、地域の食や農産物、生活、歴史、文化、自然環境を大切に、個性と多様性を尊重するまちづくりを提唱する地域文化運動です。現在は「スローシティ国際連盟」によって管理運営され、30カ国278都市が加盟し、大規模化や利益、効率の追求だけではなく、地域の本質的な価値を引き出し、マイペースに自分たちの

地域でしかできないまちづくりを推進しています。

ナポリの路地に見る暮らしの幸福度

「ほどほど都市」は、暮らす人にとってどのようなメリットがあるのでしょうか。そのヒントは、イタリアのナポリにある人々がたくましく暮らす庶民地区で見つけることができるかもしれません。イタリアの新聞による「イタリアで住みよい町」のアンケート上位には、いつも北イタリアの町が並びます。一般的に住みよい町は、収入が得やすく、インフラが整備され、住環境がよく、行政サービスが充実しているなどの指標で選ぶため、北部の町が選ばれるわけです。ところが、イタリアの北東部は国内での自殺率ももっとも高いというデータがあり、南部は欧州を含めても自殺率ももっとも少ない地域とされています。ナポリの自殺者の少なさは顕著で、経済的には貧しくても、家族や親戚、近隣と密度の高い付き合いや相互扶助が残っていて、精神的にゆとりがあるから人々が元気なのです。

地域再生などをテーマにイタリアで活動している中橋恵さんが、ナポリでもっとも庶民的な町の一つであるサンタ地区について研究をしているのですが、彼女のレポートによれば、低所得者層は路地に面した30～50㎡ほどの狭い部屋に住み、路地に椅子やテーブルを出して、路地をサロンのように使うことがあたりまえになっているといいます。プライバシーはないが、近隣のネットワーク網があり、移民も含めた他者を許容する精神があるのです。そしてサンタ地区の人たちは、貧しいからといって自分たちを卑下せず、



上●「カフェ・ソスパーゾ」の文化が残るサンタ地区の路上カフェ
右●ナポリ・サンタ地区の路地 (photo:中橋恵、2点共)



堂々としている。さらに、飲食店では「カフェ・ソスペース」といって、経済的に苦しい人たちのためにコーヒー代を2杯分支払う習慣があり、その伝統がコロナ禍で再評価され、広がっているそうです。そこから浮かび上がってくるのは、近年話題になっているシェアリングエコノミーやシェアリングハウスが、ここではあたりまえにあり、経済的に貧しくても精神的には豊かに幸せに人々が暮らしているという事実です。個人的に満足な消費生活や文化的生活を送ることはできなくても、コミュニティ空間があることで、物質的に豊かな生活を越え、社会的に豊かな生活を送ることができる。その方が人々の満足度・幸福度が高いのではないかという可能性が感じられるのです。

日本らしい「ほどほど都市」への期待

日本では、三浦展さんが早くからシェアという言葉を使っており、『第四の消費 つながりを生み出す社会へ』（朝日新書、2012）という本が話題になりました。第四の消費とは、少数の中流階級による第一、高度成長期の家族を中心とする第二、個人化に向かった第三を経て、1998年頃から生まれた共費、人とのつながり、シンプル、シェアなどの消費傾向のこと。バブルが弾けてもなお、特区などを設定して大規模開発が進む現状を、脇から見ていた若者たちに共通する、自分たちはもっと賢く、無理せずマイペースに、所有にとらわれることなく、家もクルマもシェアすればいいという気分を表しています。経済的なメリットだけでなく、人と一緒にいたいからシェアするという理由も興味深い。それは「ほ

どほど」という価値観と似ていると感じます。この流れを考えれば、バブル前のコミュニティのつながりが残っていた時代と、現在の第四の消費社会をミックスするような、日本ならではの「ほどほど都市」の構想が求められるかもしれません。

現時点の日本で、イタリアのテリトリーオやスローシティのような例があるかといえば見あたらないのですが、「ほどほど都市」というキーワードで町を捉えてみれば、もっと曖昧に間口を広げて観察することができ、小さな動きは各地で起こっています。

一例を挙げると、東京・国立市の谷保では、小野淳さんが「くにたちはたけんぼ」という農園を運営し、日野市の農園や一橋大学の先生や学生とも協力して、農業を活性化させる試みをしています。国立の駅前には採れた野菜を売るアンテナショップや、野菜を使った料理を出すレストランがあり、地下水脈がつながるように活動が広がっている。さらに、谷保駅近くのシャッター街になっていた商店街や団地の1階にある店舗群を活用し、農作物を製品化して売るなど6次産業化の展開まで見られます。このエリアはテナント



じんない・ひでのぶ—1947年福岡県生まれ。法政大学特任教授、建築史家。工学博士。著書に『イタリアのテリトリーオ戦略 甦る都市と農村の交流』（木村純子共編著、白桃書房、2022）、『都市のルネサンス イタリア社会の底力』（古小鳥舎、2021）『水都 東京 地形と歴史で読みとく下町・山の手・郊外』（筑摩書房、2020）他。

料が安く、若者にとって活動の場が得やすいという力学が働き、町の再生が起こっているのです。他にも、七尾市能登島曲町、埼玉の鳩山町、島根の石見銀山、岡山市の西大寺周辺、松山市の三津浜など、似たような動きは各地に生まれている。

これらの動きは、刻々と状況が変わっていくととも不安定なもので、地域が抱える条件による個別性が高く、推進すべき目標のようなかたちで表現できるものではありません。草の根的活動から自然発生しないと成り立たないことだといえます。しかし、だからこそ多様性を受け入れたり、ゆるさを許容できたりして、新たな価値創造につながっていく面白さがあるのではないのでしょうか。危惧しているのは、日本で起こっている小さな動きが、ほどほどを通り越し、ブランド化することで、再び市場原理に飲み込まれてしまうことです。都市をほどほどの発展に抑えるのは本当に難しい。日本各地で起こっている「ほどほど都市」の芽が、いかにほどほどのところで踏みとどまってバランスを取っていくか、今後に期待しながら観測していきたいと考えています。

対談①

「地域資本主義」の可能性

経済成長を目的として発展してきた資本主義が限界を迎えているという。資本主義の直面している最大の課題は「地球環境汚染」と「富の格差の拡大」で、その解決策として「地域資本主義」を提唱しているのが柳澤大輔氏だ。柳澤氏は、地域資本という新しいモノサシを参照しながら、鎌倉をベースにより持続的な成長を目指す「鎌倉資本主義」を実践する。一方、資本主義の歴史は、共有から私有への移行の歴史だった。個人の権利の拡大は、私有化と歩調を合わせて発展してきたという。しかし、平川克美氏は、あえてそれに逆行する共有化の道をこそ目指すべきと提言する。地域資本主義と共有という実践知。果たして、資本主義のオルタナティブになり得るだろうか。二つの実践知が明かす「ほどほど都市」の輪郭。

photo:坂本政十賜

平川克美

文筆家

柳澤大輔

面白法人カヤック代表取締役 CEO

なぜ若者は移住しようとするのか

柳澤——今、移住のサービスをやっています。移住したい人がユーザー登録すると、各地域からスカウトが届いてマッチングするというサービスですが、移住を希望する人がすごく増えています。

平川——移住というよりは引っ越しに近い感じ？

柳澤——いや、移住です。移住や二拠点居住。2、30代の若い人が多いんですが、最近では40代の方も増えています。

平川——それは東京から出ていく人が多いということ？ 東京の何が嫌なんだろうか。

柳澤——理由はさまざまですが、子育て環境を上げる人はけっこう多いです。手厚いサポートのある町は人気

ですね。また移住した先でただ住んでいるだけだと「もっといいところがあるんじゃないか」と移りたくなるんですが、地域にかかわるようになると定着率は高くなるようです。

平川——なるほど。自分の町という感じがするんだろうね。

柳澤——そうやって初めて第二の故郷になる、そういう感じでしょうか。

最近の傾向としては、そういうかたちで町にかかわっていく人が増えてきていますね。Z世代なんかはとくにそう。

平川——ところで「地域資本主義」というのは柳澤さんが考えたの？

柳澤——はい。「法人」という堅いものと「面白」を付けて「面白法人」としたように、「資本主義」というグローバルなものにローカルな「地域」を付けてみました。

今、資本主義が直面している最大の課題は何かといえば「地球環境汚染」と「富の格差の拡大」ですが、この二つの問題は何に起因しているのだろうか。そう考えた時に、それはGDP(国内総生産)という単一の指標を企業や国が追い求め過ぎたことに原因があるんじゃないかと。GDPは、経済活動の状況を示す指標ですが、この一世紀近く経済的な豊かさを測るための指標としても使われてきました。GDPが右肩上がり成長し続けることがよいとされてきた。でも、本当にGDPだけが豊かさの指標になるのだろうか。もっと別の指標があってもいいんじゃないか。そういう思いから考え出したのが「地域資本主義」であり「鎌倉資本主義」です。

平川——「地域」がポイントなんだね。
柳澤——僕たちが考える地域資本は次の三つです。財源や生産性である「地域経済資本」、人のつながりである「地域社会資本」、自然や文化である「地域環境資本」。いわゆる資本主義という資本や売上は、僕たちの分類では「地域経済資本」です。この「地域経済資本」に「地域社会資本」と「地域環境資本」が加わることで初めて「地域資本」になります。三つ合わさらないとダメなんですよ。

平川——経済資本はGDPというかたちである程度定量化されてきたけれど、地域社会資本も地域環境資本も従来の資本主義では定量化できなかつた。その意味で、新しい価値の指標といえそうだな。

柳澤——短期的な経済合理性を追い求めるのではなく、持続性のある成長を目指す。地域資本という新しいモノサシを導入することで、「地球環境汚染」を解決し「富の格差の拡大」を抑えることができると考えます。

平川——資本主義の話が出たので、ちょっと言っておくと、資本主義の本丸は株式会社だけど、株式会社にとって一番大事なことはなんだと思う？ 常に需要が供給を上回るということです。市場総体として需要が供給を上回っていれば、資本主義は駆動し続けますが、逆に供給が需要を上回ると資本主義はそこで終わる。

柳澤——人口が増え続けることが大前提というわけですね。

平川——その人口が2000年を境に減り始めているんですよ。しかも、世界同時に。2100年には、日本の人口は半分以下になるという厳しい予想をする専門家もいます。株式会社の危機が言われたのがリーマンショックの時に、あの頃から供給が需要を上回り始めた。つまり、需要と供給の関係が逆転したわけだ。そうすると、株式会社は生き延びる道がないから、なんとか未開発の市場を探そうとする。まず最初にやったのがグローバリズムです。発展途上のところに進出していった安い労働力を買って大量にモノを売りつける。次にやったのが金融です。金融とインターネットの世界。

柳澤——今、そっちがどんどん膨らんでいます。

「生の原基」を衰弱させるイノベーション

平川——かろうじて金融やインターネットで延命しているけれど、僕は相当きついのではないかと見えています。株式会社の歴史をひもとくと、株式会社の原動力はイノベーションで、イノベーションが次々と起こっていくことで株式会社は生き延びてきた。ところがイノベーションが、人間の「生の原基」と相反するようになったというのです。「生の原基」は、思想家のイヴァン・イリイチの言葉で、人間がもともと持っている生きるための力のことで、その生の原基を弱める方向でしかイノベーションが起こらなくなるとイリイチは警告する。つまり、資本主義が発展することは、結果として「生の原基」を弱めることになるというわけですね。「生の原基」がどんどん弱くなっている。言い換えれば、便利になることによって生きる力が弱められ、最終的には人間を不幸にするとイリイチは言っています。

柳澤——スマホなんかはまさにそうかもしれないですね。

平川——これからも株式会社隆盛でガンガンいくぜ、という人はさすがに今はなくなった。

柳澤——少なくなったんですが、時価総額を大きくすることに躍起になり、過去最高益だ！と賞賛し合う世界であることは変わりません。それに利益が出るとSDGsに対する対応もできます。結局、利益率が高い会社は、いい環境対策ができるので、どこまでも

利益を求めるようになって、その悪循環から抜け出せないんです。

平川——イリイチが言うように「生の原基」と文明が相反し始めているんだと思う。

柳澤——それが地方回帰にもつながっているんだと思います。

平川——僕はベンチャー企業を日本にたくさんつくろうと旗振り役をやってきた。「アントレプレナー・オブ・ザ・イヤー」というのを自分でつくり、すでに10年はたったけど、この10年の間で、僕の周りで5人自殺しているんですよ。

柳澤——社長がですか。

平川——そう、全部経営者。僕も会社を畳みました。借金が1億円くらいあったけど、日本の会社のシステムでは、基本的には連帯保証人である代表取締役が全部負うということになる。まず預金を全部はたき、マンションも売った。マンションを売るということは家族が離散するということです。女房と別居し、娘とも別々に住み、定期も全部崩す。そうすると、手元に残ったのは数十万円だけ。つまり、実質的にほとんど自己破産です。ところが、そうやってすっからかんになってしまうと、不思議なことに気持ちがスッキリして、まるで別世界に暮らしているように楽になった。その日暮らしになると、まず自分の生活圏がものすごく小さくなる。ほぼ半径500mから出なくなる。

柳澤——お金を使わないからですか？

平川——お金使うのをやめるんじゃないかと、じっさいに使わなくなっちゃう、外に出る必要がないんだから。僕は喫茶店をやったたでしょ。朝から自分の喫茶店に行って書きものをする。めしはそのへんの大衆食堂で食べて、風呂は銭湯。そうしたら、金使わないんですよ。何より借金がなくなったというのが本当によかった。今カヤックは借金があるの？

柳澤——普通に銀行から借りてます。僕は経営者として普通に欲望があります。自分が欲望を持ち続けて大きくしないと社員の給与も上がらない。別に上を目指す必要はないんですが、やらないとこのルールから外れちゃう。自分が欲望を誇大にし続けなければいけないと自分に言い聞かせています。それが上場企業の経営者のルールでもあると思うからです。もちろんそれだけでは環境に良くないことも起こるからということで、ESG投資というようないい仕組みが出てきているわけですが、未来永劫成長し続ける仕組みをつくれたら賞賛される世界は変わりありません。起業家は「0→1(ゼロイチ)」でいいんですが、経営者というのは、「1→100(イチヒャク)」という職能なんじゃないかと思っています。それがいいか悪いかは別として、職能を極めることで人間として修行していく。そんなものじゃないかと思っています。

地域通貨の新たな可能性

柳澤——2018年から地域通貨に取り組んでいます。



平川克美

ひらかわ・かつみ—1950年東京生まれ。文筆家。早稲田大学理工学部機械工学科卒業後、翻訳を主業務とするアーバン・トランスレーションを設立。1999年、シリコンバレーのBusiness Cafe Incの設立に参加。2014年、東京・荏原中延に喫茶店「隣町珈琲」をオープン。著書に『共有地をつくる わたしの「実践私有批判」』（ミシマ社、2022）、『株式会社の世界史 「病理」と「戦争」の500年』（東洋経済新報社、2020）、『見えないものとの対話 喪われた時間を呼び戻すための18章』（大和書房、2020）他。



柳澤大輔

やなさわ・だいすけ—1974年香港生まれ。面白法人カヤック代表取締役 CEO。慶應義塾大学環境情報学部卒業後、ソニー・ミュージックエンターテインメントに入社。1998年、学生時代の友人と共に面白法人カヤックを設立。2014年に東証マザーズに上場。鎌倉に本社を構え、ゲームアプリ、キャンペーンアプリ、ウェブサイトなど数多くのコンテンツを発信。著書に『リビング・シフト 面白法人カヤックが考える未来』（KADOKAWA、2020）、『アイデアは考えるな。』（日経ビジネス人文庫、2020）、『鎌倉資本主義 シブゴトとしてまちをつくるということ』（プレジデント社、2018）他。

平川—何ていう通貨なの？

柳澤—「まちのコイン」です。「地域資本主義」の社会資本は人のつながりです。地方へ移住する若者が増えていると言いましたが、地方に住もうと思うのは、社会資本（人のつながり）と環境資本（自然や文化）が東京よりも豊かだからです。でも、この豊かさは経済指標=GDPでは測れません。地域通貨は、その豊かさを測ることができると思うんですよ。

平川—地域通貨で測れる？

柳澤—お金（法定通貨）と同じように価値の交換はするんですが、体験に紐付けられていて、たとえば海をきれいにしたらコインがもらえたり、友だちにおごったりすると増えたりするんです。町のバーに入れば普通に支払いができて、おまけにバーの店長に愚痴を聞いてもらえたりする、いろいろなことができるコインです。人と人のつながりが可視化できる。逆に、使わずに貯めておくと、価値が下がったりする。地域ごとに、自分たちの大切にしている価値に合わせて、通貨の価値を変動させられますし、法定通貨と違っていくらでも発行できるのも大きなメリットです。

平川—その通貨自体はデジタルなの？

柳澤—デジタルです。すべてスマホで完全にQRコード決済です。今20カ所ぐらいの地域できて、まだ地域間での交換はできないんですが、いずれ為替レートみたいなものもつくろうと思っています。一番人のつながりが濃

いエリアのコインは交換レートがいいというような（笑）。まったく新しいコインなので、普及するまで時間がかかると思います。普及しないと使い道もないし、住民からするとコインを持っていてもつまらない。そこでゲーム性を入れて普及するまで飽きないように工夫する。それはゲームをつくっている僕らだから提供できるかなと思っています。

平川—株主は何て言ってるの？

柳澤—「そんなことばかりやるな」という株主もちろんいますよ。でも、カヤックみたいな会社はそういうことをやらないと意味がないだろうと応援してくれる株主もけっこういます。もちろん、僕はこれをちゃんと事業として黒字化を目指しています。

21世紀の精円幻想論

平川—僕が最近書いた本は『共有地をつくる わたしの「実践私有批判」』（ミシマ社、2022）というもので、中心的課題は、「私有」を批判的に検証することです。「私有」の反対は、私有をやめて無一物になることではなくて、「共有」ということです。競争社会を駆動している無際限な私有化をやめて、本来、社会の共有物であるべきものをもとのとおりに共有物に戻す。だからといって、すべてを共有化せよなんて言いたいわけではありません。この社会を安定的に持続させていくためには、社会の片隅にでもいいから、社会的共有資本としての共有地が必要です。誰のものでもないが、誰もが立ち



「ほどほど都市」の風景—①

東京都品川区「中延商店街」。
東急池上線「荏原中延」駅と、東急大井町線・都営浅草線「中延」駅の間へのびる約330mの商店街。愛称は「なかのぶスキップロード」。商店街にアーケードがかかったのは1969年。全国チェーンの店も増えつつあるが、1933年に当地に創業した「染谷家具」、1935年創業の「豆のさがみや」など、戦前から続く老舗もあり、地元の人々の日常を支えている。この商店街のなかほどに平川克美氏が店主を務める「隣町珈琲」がある。



「ほどほど都市」の風景—②

神奈川県鎌倉市「まちの社員食堂」。面白法人カヤックの声がけで、2018年、鎌倉市に拠点をもち企業・団体31社が共同してつくった、鎌倉市で働く人のための食堂。鎌倉市内約50軒の協力レストランが週替わりでメニューを提供、会員企業・団体の社員は割引価格で食事をする事ができる。カヤックでは他に「まちの保育園」「まちの人事部」など、地元企業とコラボレーションしながら「まちのシリーズ」を展開。「地域資本主義」を実践している。

入り耕すことのできる共有地があると、私たちの生活はずいぶん風通しのよいものになるはずだと、簡単に言えばそういうことをこの本で論じました。僕は「縁側モデル」と呼んでいるんだけど、縁側のような場所、自分のものであるんだけど、自分のものではない。自分の内側でもあるんだけど、外側でもあるという隙間。

柳澤—そういうところに文化がある。縁側的な空間は、「ほどほど都市」の条件かもしれませんね。

平川—本屋があるかどうかのポイントかもしれない。僕的に言えば、本屋と銭湯と喫茶店だけ。

柳澤—あとパン屋ですね。美味しいパン屋がある町は、やっぱり人気があります。

平川—平田オリザが豊岡に大学(芸術文化観光専門職大学)をつくったでしょ。彼は演劇の町をつくらうとしてるんだけど、行政も人を呼び寄せることをいろいろ考えている。でも、彼は面白いことを言っていて、人が一番集められるのは、おいしいイタリアンをつくることだって言うんです。辺鄙な田舎だけど、すごくおいしいイタリアンの店があると、それだけでそこに一つ灯がともると言うんです。だから、別に図書館がなくても、大学がなくても、おいしいイタリアンが1軒あるだけで、そこに人々が戻ってくる。それはイタリアンを食べるために戻るとはじゃないんです。そのこと自体がその地価を高めると言うんです。

柳澤—移住者に人気がある地域はだ

いたいそういうのが揃ってますね。しかも、それはチェーン店のような東京資本じゃなくて、ちゃんと移住した人がやっています。

平川—それが大事だね。

柳澤—僕も本屋じゃないですけど、町をコンテンツ的に捉えて、「まちの社員食堂」というのをつくりました。鎌倉に拠点を置く企業・団体が会員企業として参画して、鎌倉市内で働く人は誰でも利用できます。メニューは週替りで鎌倉のレストランに出店してもらっています。

平川—それは柳澤さんが企画して？

柳澤—そうです。

平川—宇沢弘文さんが言っていた社会的共通資本というのかな。要はライフラインですよ、医療とか水道とか、私企業にやらせちゃダメだって言ってます。

柳澤—地域通貨も一企業であるカヤックがやっているから信用できないと言われてました。

平川—その意味でいうと、会社も一種のコミュニティか。

柳澤—コミュニティですね。会社という組織がコミュニティ化してきていますし。コミュニティの方がフラットで、ヒエラルキーがない。カヤックも一種のコミュニティだと思っています。誰にもコミュニティに貢献する余地があるというか、逆に言うと、それをやっていくことが楽しいんですよ。

平川—贈与交換という交換スタイルが一つのヒントになると思う。たとえ





ば、柳澤さんが僕に何かをくれる、贈与してくれて、僕はお返しをする(返礼)というのが贈与交換の基本じゃないんですよ。これは闘争的贈与交換(ポトラッチ)といわれるものなんですけど、これだとお互いに競争しちゃうんだよね。自分がより多く贈与したいと。それではダメで、そうならない贈与交換が大切なんですよ。

贈与されたら、それを第三者にパスをするというのが贈与交換の一番重要なところなんです。マルセル・モースが言ったように第三者にパスをして、それがさらにまた別の第三者につながっていく。モースはこれを「全体的給付のシステム」と呼んでいるんです。全体が生き延びていくためのシステムを社会のなかに組み込んだわけなんです。パスしたものが回り回って自分のところに戻ってくるまでに何十年もかかるようなものもある。第三者にパスをすることによって、それがいつか自分に返ってくる。日本にも「情けは人のためならず」という言葉があって、あれは完全にモースの贈与論なんです。

柳澤——そのシステムが見える化できて、体感できればほどよい都市かもしれませんね。「まちのコイン」も20カ所でやってみて、ほどよいサイズだとハマるんですけど、広過ぎるとうまくいかない。その距離感みたいなものがじつは大事なかもしれません。

平川——そうだね。なんでも過剰になっちゃうとダメなんだろうね。株式会社も過剰を求め過ぎた。その点ここ荏

原中延はいいでしょう。完全に東京ローカルですから。

柳澤——商店街がまだ元気ですよ。

平川——元気。ここの商店街の特徴はチェーン店がほとんどないこと。

柳澤——チェーン店であっても、その町に貢献するというロジックが入っていればいいんですよ。別にGoogleとかAmazonがバンバン日本に来てもいいんです。外資だからけしからんじゃなくて、来た以上、日本に貢献しようという意識があれば、全然OKです。

平川——そもそも、貢献しようなんて意識ないんじゃない？

柳澤——それは指標に入っていないからですね。企業は結構数字に弱いから、そういう指標があれば、のってくると思います。

平川——『21世紀の楢岡幻想論』(ミシマ社、2018)で書いたんだけど、資本主義か共産主義か、コミュニタリアニズム(共同体主義)か社会主義か、そういうように二者択一を迫ってくる。おまえはどっちなんだと。この問い自体がじつは間違っている。デビッド・グレーバーが言うていたけど、彼の話のなかで一番重要な概念は「基盤的コミュニズム」です。これは何かというと、ゴールドマン・サックスのような資本主義の権化のような会社でも、それを動かしているのはコミュニズムなんだというんです。「水道が壊れたから、ちょっとスパナ取って」と言った時に、同僚が「はいよ」と言って取ってくれる。その時に、「俺の労賃がいくらだから、いくらよこせ」と

は誰も言わない。つまり、その一つの場を共有している人たちの間では資本主義ではなくコミュニズムで動いている。じつはコミュニズムの上に資本主義が乗っかっているというわけです。

つまり、二つの焦点があるわけですよ。これが近づいたり離れたりする。うーんと離れれば1本の線になってしまう。うーんと近づくと楢岡が普通の丸になって、一方の焦点がつくっていた世界が完全に一つの世界の背後に隠れてしまう。つまり、二者択一の世界になる。人間というのは完璧な円を求めるんだよね。だけど、そうじゃなくて、本来は楢岡なんだと。焦点が二つあるんです。われわれは、この二者択一の問題からなかなか逃れられないんだけど、そうじゃない。言ってみれば、ほとんどすべての問題は二者択一じゃなくて「程度」の問題なんだ。どの程度まで資本主義的なものを活かし、どの程度まで社会主義的なものを活かすか。資本主義の社会だからといってコミュニズムがないと思ったら大間違いで、コミュニズムの社会だからといって資本主義がないと思ったら大間違い。つまり、二者択一の問題を程度の問題として読み替える。これが知性というものなんだ。そういうふうに見えるべきだと。これが基本ですよ。

柳澤——それはまさに「ほどほど」ってことですね。

平川——ほどほど都市か。うまくまとまり過ぎたけど、そういうことなんだね。



「ほどほど都市」と適正規模

現在の「都市」の姿が過剰であるとすれば、どれくらいの規模、どれくらいの人が集積できる「都市」が適正なのか。アーバン・スタディーズと呼ばれる研究を通じ、都市の姿を探究する都市社会学者の町村敬志氏と、データサイエンスと社会工学の観点からコンパクトシティ研究を行う谷口守氏に「ほどほど都市」の適正規模についてお考えをうかがう。

photo:坂本政十賜

町村敬志

東京経済大学コミュニケーション学部教授
一橋大学名誉教授

谷口守

筑波大学大学院システム情報系社会工学域教授

「過剰さ」の軸を見極める

町村——「ほどほど都市」というテーマをいただいた時、「ほどほどがいい」という時代の要請にまず共感できると感じましたが、自分自身は、都市のことを、じつはもっと「ガツガツ」したものと捉えていた点にも気付かされました。私は北海道生まれで、都市の原体験は、高校進学で通った札幌です。ちょうど1972年札幌オリンピックの開催直後、高層ビルが次々と建ち、地下鉄が開通し、町が劇的に変わる時でした。その後、1970年代後半に、大学進学のために東京に出てきます。

高度経済成長期末期からバブルの時代を通り抜けてきた世代として、都市がもつ猥雑さや輿行の部分に惹かれつつ、イケイケで華やかな面、ある種の過剰さを無意識に肯定的に見てきた自分がいることにも気付かされます。それだけに「ほどほどがいい」と言う前に、そこから遠い都市、課題を抱えた

社会をつくってきてしまった世代としての反省が浮かんできます。

谷口——私は「ほどほど」というキーワードから、二つのことを思いました。一つは具体的な都市として「ほどほど」とはどういうイメージなのか。私自身の経験で言うと、もともと神戸に生まれ、大学は京都で、卒業後は筑波に赴任したのですが、人口100万人以上では都市の規模が大き過ぎると感じていました。それで岡山大学に赴任するお話をいただいた時、「ほどほどでちょうど良いところに行ける」と思ったんです。ところが行ってみると「ちょうど良い」とは思えなかった。都市的な欲求が必ずしも満たされないんです。そういう意味から考えると「ほどほど」のレベルはけっこう高いのではないかと思います。

もう一つ、2022年1月に発行された都市計画学会の学会誌『都市計画』で持続可能性の特集に寄稿したのです

が、その時に「カスケード化」という言葉を使いました。今、どこの町も人口がどんどん高齢化し、財政状況が悪くなっている。データのみにみると、5年前に衰退が著しかった都市を、当時はまだマシだった都市が、滝が流れ落ちるように（カスケード）追いかけて衰退しています。「ほどほどでいいや」と思っても、「ほどほど」であり続けることは、じつは非常に難しいんです。町村——東京から見ると、「ほどほど都市」とは、今ある過剰さを抑制する方向がイメージされると思いますが、東京以外の都市では、「ほどほど」を維持することの方が難しいということですね。私が生まれた町も、当時と比べれば人口も増え、札幌に隣接する町として利便性は向上しているようですが、かつて駅前にあった商店街は消え失せ、すっかり活気が失われています。ここからもうかがえるように、「過剰」という事象にもいくつかの側面があると思います。一つは、空間的な意味の過剰や密度。ボリューム、そして高さに関係していますが、この空間的な過剰をどう考えるのか。もう一つ、時間的な過剰や密度もあります。たとえば、スクラップアンドビルドの速度を速め、資本をより多く回転させることで、結果的に過剰が生み出されるケースもある。さらに、この二つの過剰さや密度の組み合わせという軸がある。超高層ビルが十分に保守されないまま長く放置され意味を失う場合もあれば、小さな町並みが頻繁に手直しされることで独特の密度感を保ち続ける場合もあります。何が問題でどう対応していくかは場所や地域によって違う。そのまだ

ら模様が人々に何をもたらしているのかを、きちんと捉えておくことも大切だと思います。

谷口——コンパクトシティの議論が始まった20年ほど前、当時は一番の推進目的は環境負荷の低減にありました。その時出てきたのは、各町をコンパクトにして日本中に間隔をあけてばら撒けば良いという議論です。計算上はそれで辻褃は合う。ですが現実にはそんなことはできるはずありません。地方は地方、中核都市は中核都市、中枢都市は中枢都市、東京は東京で、それぞれが適正さを目指すという方が実現可能です。

ですから、コンパクトシティとはどんな都市かと問われても、じつは専門家でもその定義をお答えることは容易ではありません。むしろ何か統一された定義のもと、理想的な適正規模を追求するのではなく、どこの町でもそれぞれに、過剰さが課題とならないよう上手にブレーキをかけていくことが必要だと思います。もっとも、それを政策としてずっと維持するとか、具体的にどう計画していくのかは簡単な話ではないのですが、どのような都市を目指すのかを考えていくプロセス自体がまちづくりになるはずですよ。

町村——地方の中山間地域を訪ねると、残っているのは高齢者世帯2、3軒というケースは珍しくない。そうすると集落の維持は困難ですから、移転してコンパクトにまとめるのが合理的に思えます。ただ、そういう土地にも、今は暮らしてなくても、盆正月や田植えの時期には親族が戻ってきて、つながりが維持されているケースがあ



町村敬志

まちむら・たかし—1956年北海道生まれ。東京経済大学コミュニケーション学部教授、一橋大学名誉教授。博士（社会学）。東京大学大学院社会学研究科博士課程中途退学。著書に『都市に聴け アーバン・スタディーズから読み解く東京』（有斐閣、2020）、『脱原発をめざす市民活動 3.11社会運動の社会学』（共著、新曜社、2016）、『越境者たちのロスアンジェルス』（平凡社、1999）他。



谷口守

たにぐち・まもる—1961年神戸市生まれ。筑波大学システム情報系社会工学域教授。京都大学大学院工学研究科博士後期課程単位取得退学。工学博士。著書に『世界のコンパクトシティ 都市を賢く縮退するしくみと効果』（編著、学芸出版社、2019）、『入門 都市計画 都市の機能とまちづくりの考え方』（森北出版、2014）他。

る。コミュニティとしては死に絶えてはいないんですね。それだけに、短期的な合理性だけで解決することはできません。

谷口—中山間地域は国土保全上もある程度人が暮らしていた方がいいですし、無理に移転させても、いつの間にか人が戻っていることが海外の事例でもよくあります。ただ強制的にでも止めた方が良いケースもある。私はこれを「トリアージ」と言っていますが、とくに、炭鉱で発展した町など、産業が一つしかない場合、それがダメになると町を維持することは難しい。都市には多様性が必要だということかもしれません。もしかすると、多様性が過剰で、寛容度が高過ぎる都市の課題もあるかもしれませんね。そっちの議論はまだやったことはありませんが、東京が抱える課題には、そのことも含まれていそうです。

東京はとても密度が高くて、公共交通の利用率が高いので、1人あたりの環境負荷は低いんです。それはいいことかもしれませんが、その代わり、みんな我慢している。我慢の軸があって、それが過剰だった。コロナ禍になって、満員電車で通勤したり、行列に並ぶことが少なくなったら案外心地よいというのは、我慢が減ったからですよ。今までは、効率は良かったけれど、みんな我慢していたわけです。

町村—そういう「我慢」みたいなことも計量的に測定したりしているんですか？

谷口—「我慢」そのものの計測は見たことないですが、近いところで満足度の計測は多数あります。今、何でも

エビデンスベースで考えるじゃないですか。私自身、以前、鉄道新線をつくる時に費用便益分析を計上するためにマニュアルをつくったことがあります。エビデンスベースで数字やお金で換算できるものを積み上げていくと、結果的に数字にならない重要な効果を見落としてしまいます。ですから、数値化しない方がいいこともある。ただ最近では、たとえば健康だと、ウェルビーイングといった概念を計測して効果を表すことができないか、ということが考えられるようになってきて、効果計測の対象が主観的な要素にシフトしているように思います。

「ほどほど都市」は都市の「体質改善」から

町村—「ほどほど」というのはとても心地いい言葉ですが、最初から「ほどほど」を目指すことは相当に難しいことだと思います。やはり、ある程度どこかに向かって走っていく勢いがあったら、そのうえで諸々の状況を見極め、判断しながら「そこまでなくていいよね」と落ち着くところに落ち着いた結果が「ほどほど」になる。「ほどほど」という概念は魅力的ですが、これを実際の都市計画に活かす方法はあるのでしょうか。

谷口—一つあり得る方策じゃないかと考えているのは、都市の「体質改善」です。私は数年前から、バイオミメティクス（生物模倣学）に注目していて、今度、高分子学会という化学の分野と共同研究を始めようとしています。バイオミメティクスとは、生物がもつ優れた形態や機能を新しい技術開発やも

のづくりに活かそうという研究で、建築や交通インフラ、都市計画での活用も期待されている。この視点から考えると、現在の都市って、生活習慣病の状態にあるんですね。基本的にメタボなんです。他には、空き家がいっぱいある状態を骨粗鬆症に置き換えて考えてみるとか、郊外の大型ショッピングセンターは、いわば糖尿病のような状態ではないか、とか。それらを改善するための方法を生物に学びながら考えていこうとしています。そのなかでも最大の課題はタワーマンションで、私はこれを、がん細胞だと捉えています。そもそも、周りの人口が減っているのに、タワーマンションでだけ人口が増えて黒字化するビジネスモデルが、町にとって良いはずがありません。しかも放っておけばどんどん転移して増えていく。かたちとしてはコンパクトに見えるのですが、実態としては持続可能ではなく、問題があるというメッセージを発し続ける必要があります。

一方で、そうやって衰退してしまった町は、元気になるためにカンフル剤を期待します。しかし無闇にカンフル剤を打っても対症療法にしかならず、悪くすれば症状を悪化させてしまうことがある。補助金などがまさにそうだと思います。

そういう意味で、私が長年口を酸っぱくして言い続けているのは、コンパクトシティは都市にとってのカンフル剤ではない、ということです。駅前にタワーマンションをつくって、これがコンパクトシティだというような間違ったイメージはいまだに根強い。ですが、これはカンフル剤でしかないばか

りか、がん細胞にもなり得る危険なものです。ですからもっと都市の構造を体質改善するようなかたちで、中長期的な視点に立って考えることが大切です。この「中長期的」ということが「ほどほど」につながっていくような気がします。

町村—個人的には今のお話は非常に共感できます。ただ一方で、バブル期に地価が高騰して、中堅所得層が都心に暮らせない、東京には家をもてないという状況があった。それが2000年代に入ると地価が下がり、比較的中堅層でも都心に暮らせるようになり、タワーマンションを中心とした都心居住、都市への回帰が進みました。そういったある種のニーズ、希望をもって人がいる時に、納得してもらいながらきちんと導いていくことが、どうしたらできるのでしょうか。

谷口—そのとおりですが、自治体の都市計画審議会などに呼んでいただいて話を聞いていると、今はまだ、タワーマンションを建てられるように規制を外してほしいという要望の方が強い。まずはそこからかな、と。

また防災上の問題も大きい。耐震性能はそれなりに優れているかもしれませんが、じゃあエレベーターが止まった時にはどのようにサポートするのか。規模が大きければ大きいほど、問題も大きくなります。実際、2019年10月の台風19号では川崎市の武蔵小杉駅周辺のタワーマンションが被災し、浸水による停電に伴い、復旧までかなり時間を要しました。

町村—しかし、すでにこれだけ多くのタワーマンションが建ってしまっ

もいる。それを簡単に壊すわけにはいきませんし、実際に人が暮らし、いろんな活動が行われています。高層であるという外観はともかく、せつかくできた都市のストックですから、何か、内側から掘り崩していくようなかたちで、ほどほどに良好なものとして存続させることはできないでしょうか。

谷口—「掘り崩す」というのは、コミュニケーションができるようにするというイメージですか？

町村—それも含めて。タワーマンションというかたちで総称される建物であっても、その中では人々の活発な活動が展開され、ほどほどなサイズの良好なコミュニティが築かれている……というような。

谷口—たとえば世界で見れば、もっとも人口密度が高いといわれているのは香港で、タワーマンションも林立していますね。そのなかの、比較的中堅層的なタワーマンションというのか、家の中にはトイレも台所もないというものがあるって、外部とつながりながら生活せざるを得ない状況が生まれている。1階にはお惣菜屋さんや飲食店があって、そこが住民のコミュニティスペースになっています。つまり、家に住んでいるのではなくて都市に住む形態です。個人的にはこれはなかなか良いなと思っていますが、今の日本のタワーマンションは外部と隔絶するつくり方になっているので、中から掘り崩すのは難しいように思います。

リアルとサイバーをつなぐ新たな田園都市構想

町村—最初に少しお話ししたとお



「ほどほど都市」の風景—③

香川県高松市「高松丸亀町商店街」。
商店街が主体となり、定期借地権制度を利用した再開発事業を2004年からスタート。
2022年現在、ようやくその全容が見えつつある。
そのまったく新しい事業スキームは全国から注目を集め「奇跡の商店街」とも称されるが、この奇跡は、新たな価値の創造から生じている。
商業的成功よりも「ここに住まう」ことの喜びや満足感を重視した取り組みにより、ここでは、良質な「ほどほど都市」が実現している。

り、私の都市的な原体験は札幌で、その後、東京に出てきたわけですが、都心の印象でいうと、札幌と東京は「程度の差」だと感じました。そのうえで私よりも「東京らしさ」を感じたのは、どこまでも町が途切れない「だから続く広がり」があることだったんです。都市というには寂しくて、農村というには人工的過ぎる町が郊外に広がっている。そういった、主に住宅地として低密度に広がる郊外と、高密度な、主に働く場所としての都心、それらの領域が組み合わさることによって「東京」という町がつくられているのだと思います。

そのうえで、都市をコンパクトにするという時に、首都圏のように、連続的につながる町々の関連性、お互いが交錯し重層することで働くという観点では、どのようにそこへ組み込まれていくのでしょうか。

谷口——じつは今、その辺りが非常に問題になっています。地方分権が一つの社会的正義のように捉えられていて、確かにそのメリットもありますが、コンパクトシティ整備にとって、このことはデメリットに働くケースが多い。今、ほとんどの自治体が都市マスタープランにコンパクトシティ化を組み込んでいます。ですが、それぞれが個別に計画を立てるため、各市町村間では拠点やネットワークの整合性がまったく取られておらず、実態としては意図とは逆の分散化計画になっています。広域調整をきちんとできる仕組みが必要です。

町村——昔からの大都市圏の問題がより顕在化してしまったようですね。で

すが今後、人口減少社会のなかで大都市圏的な発想、調整のメカニズムも新しく考えなければならないでしょう。谷口——コロナパンデミックを受け、フランスのパリ市長が提唱した「15分都市」という構想がヨーロッパの都市を中心に世界各国に広がっています。日本でも2020年に、国土交通省が「新型コロナ危機を契機としたまちづくりの方向性の検討について」として、専門家61人にヒアリング調査を行ったうえで、一定のコンセプトを打ち出していて、これがパリの「15分都市」とも同趣の、なかなか良いコンセプトになっています。ただ、それに見合った投資がなされていないことが問題です。

たとえば最近、駅のコンコースなどに電話ボックスみたいなブースができて、リモートワークにも使えるようですが、あれは、都市計画の感覚から言えば乱開発以外の何者でもありません。本来であれば計画的に、都市の中に素敵なコワーキングスペースをつくるべきです。また郊外の住宅地で15分圏内の生活を満足させるためには、おそらくネット通販も前提になっているはずですが、そこで使ったお金はすべて地域の外に出て行ってしまいます。そういう意味も含めて、投資の仕方も考えながら、サイバースペースと実空間との使い回しを考え直すべきでしょうね。

町村——サイバースペースのお話が出ましたが、ネット上での買い物も含めて、サイバースペースがこれだけ発達してきた時、リアルな都市はそのスピードに追いつけなくなっています。





1980年代、グローバリゼーションが急激に進展していくなかでは、ニューヨークやロンドン、東京などの都市は、経済や変化の最先端にあるものとみなされてきた。それが1990年代以降、インターネットの普及に伴い、スピード感や変化の速さはサイバースペースにこそ宿り、都市は鈍く、遅いものだと捉えられるようになってきました。ただ、そういった都市の特徴は課題であると同時に魅力でもある。決してサイバースペースに回収し尽くされない都市のあり方というものを、改めて、哲学的・思想的なことも含めて考えた方がいいでしょうね。

谷口——サイバースペースに対しても、都市計画はある程度責任をもたないといけないと考えていて、その時に、私は「ハードに戻れ」という話をしています。ご存じのとおり、1898年に田園都市論を展開したエベネザー・ハワードです。田園都市論が誕生したきっかけは、1800年代、産業革命が進行したイギリスで都市に人口が集中して生活環境が悪化したこと、さらにロンドンでのコレラの蔓延でした。この時、都市と農村という二つのマグネット、いずれもそれぞれに魅力があるけれど、どちらにも限界があることが浮き彫りになり、「Town & County」、つまり田園都市という三つ目のマグネットが大事で、この概念を生かした空間づくりをしようと言ったのが、およそ100年前です。

これを今の状況に置き換えると、今回もコロナという感染症がきっかけとなり、リアルスペースのマグネットと、サイバースペースのマグネット、それ

ぞれの可能性と課題が浮き彫りになってきた。むしろ今はサイバーの方に過剰なアクセルが踏まれているので、それをうまく戻すことも含めて、リアルとサイバー、これをうまくセットにして、ハイブリッドな空間をどうつくるか、100年前の田園都市に代わる新たな空間づくりが求められている。

もっとも、サイバーに行き過ぎだという意識はコロナ禍以前からあって、私は10年以上前からサイバースペースにも都市計画の規制をかけるべきだと言ってきました。笑われるだけで、誰も取り合ってくれなかったんです。

町村——サイバースペースでの都市計画規制というのは、やはり一番は地域内から外部へのお金の流れでしょうね。そういう意味では、地域通貨のようなものを組み込んでいくことができそうです。地域通貨は、1990年代の終わりにNHK-BSで放送された「エンデの遺言」という番組で、ドイツ人作家のミヒャエル・エンデが現代の貨幣システムの問題を挙げ、ここで地域通貨の可能性を提案したことから、日本では2000年代に一気に全国各地に広がりました。ただ当時は紙ベースで運営にもコストがかかってしまうなどの課題があり、従来の貨幣経済のカウンターになるほど発展しなかった。それが、今やデジタル技術の発達を受け、スマートフォンも普及し、キャッシュレス決済も一般化してきたこともあって、使い勝手の良い地域通貨も誕生してきている。サイバースペースとの親和性も高いでしょう。

谷口——たとえば、エリアフランチャ

イズ型のサイバースペースにして、何か買い物をしようと思った時に自分の地域の目的地に降りるようにするなど、そういうコントロールが必要です。総合コンサルティング会社のアクセントチュアが、東日本大震災後に会津若松市でスマートシティを運営していますが、ここでは、会津若松市民が何か買い物をしようとした時には地元のものが出てくるというポータルサイトをつくっています。こういったやり方は一つの解決策かなと思います。

町村——もう一つ、先ほども少しお話ししましたが、1980年代に始まったグローバリゼーションは、もはや明らかに終わっています。新型コロナウイルス感染症は物理的な人の流れを遮断しましたが、そうでなくても、いずれ壁にぶつかったでしょう。ではそれが、今後どちらに向かっていくのか。ナショナリズムが台頭して内向きにブロック化していくのか、ブロック化とグローバル化が並走していくのか。今起きている戦争も含めて、試されている状況にあると思います。

これは私の個人的な想いですが、都市は、そういう状況のなかで、世の中が悪い方向に行かないように、人が集まって実感と共に議論できる場、拠点であってほしい。今、議論の場はもっぱらサイバースペースに移っていますが、だからこそ、リアルスペースとしての都市ならではの役割を、今こそ考えていくことが大事ではないかなと改めて感じています。

谷口——日本全体でコミュニケーションが欠けているので、今おっしゃったように、都市のなかでコミュニケーシ

ョンがあることによってグローバル化の問題解決を目指すというのは、すごく示唆的だと思います。都市は本来コミュニケーションの場。ほどほどの暮らしをしながらほどほどにつながることが理想です。

私は時に、現状の都市に対してひどく辛辣なことを言うので、都市をネガティブに捉えているように思われるんですが、そうでもありません。この20年ほどの間にコンパクトシティという概念が浸透するスピードはとても早く、急激に変化していると感じています。当初は「コンパクト化」というだけで拒絶反応があったりして、ほとんど理解していただけなかったのが、今は話を聞いてもらえる。また若い人たちが「都市のメタボが問題だ」と言えば、すんなり納得してくれます。そういう意味では、これからの都市にも期待があるし、良好な「ほどほど都市」の実現にも可能性はあると思っています。



「ほどほど都市」の核としてのコミュニティとコモンズ

過剰でもなく、寂しくも窮屈でもない「ほどほど」の都市は、いったい何を拠りどころとして実現されるのか。そこでは改めて、人間関係や人間と自然との関係の再構築が求められるのではないだろうか。都市や建築計画に共有できるスペースを設え、人と人とが関係し合える空間を創造してきた建築家・北山恒氏と、人口減少社会を見据えて、定常型社会への転換を早くから提言してきた広井良典氏に、これからの望ましい都市のありようを語り合っていただく。

photo:坂本政十賜

北山恒

法政大学客員教授、横浜国立大学名誉教授
建築家

広井良典

京大大学人と社会の未来研究院教授

「ほどほど都市」の核としてのコミュニティ空間

北山——今回の「ほどほど都市」というテーマにおいて、地域社会やコモンズという観点から私が注目しているのは、都市圏の商店街や道です。商店街は今もコモンズとして多く機能していますが、道も、本来はコモンズでした。しかしパブリックスペースとして国が管理するようになり、経済効率を優先してクルマを主役にしたまちづくりを進めたために、コモンズという性格が失われてしまった。どうしたらそれを、われわれの都市空間の主要な要素として取り戻すことができるかは、非常に重要なテーマだと考えています。

広井さんは『人口減少社会のデザイン』（東京経済新報社、2019）など多くの著書で、ぶらぶら歩きながらショッピングしたり、夕方には道端にみんなが集まっているようなドイツの都市の風景を、好ましい都市像として紹介しておられます。日本でも、クルマの進入を規制して自由に散策できるようにした商店街が見られるようになりましたが、そこから今後どんなまちづくりが始まっていくのか、興味があります。とくに今回のコロナ禍によってリモートワークが進み、通勤しないで近所の商店街に出かける生活が日常的になってきました。そんなところに、私はちょっと希望を感じているのですが

……。

広井——今のお話は、私にも非常にピンとききます。ただ「ほどほど都市」と言った時に、東京のような大都市圏、地方都市、農山村など、どんな場所を念頭に置かか、その意味合いはかなり違ってくると思います。数日前に池袋駅のあたりを歩きましたが、もう本当に人が襲いかかってくるような感じで、「ほどほど」どころじゃない(笑)。ところが地方都市では中心商店街はシャッター通りと化し、すっかり寂れてしまっている。私の感じでは、人口20万人以下の地方都市はほぼもれなく中心市街地がシャッター通りで、それよりも大きい、たとえば40万人近い高崎市や46万人規模の福山市さえシャッター通り化が進んでいます。一方に東京のような過剰な都市があるかと思うと、ほどほど以下、むしろスカスカな都市も多く、そのバランスはかなり崩れている。日本は集中に偏り過ぎているので、今後はこれをいかに分散させるかが重要だと思います。この場合、私は単なる分散ではなく「多極集中」というような言い方をして、極となる都市や町がたくさんあって、それぞれの極はある程度の集中、まさに「ほどほど」な空間になっているような、そういう姿が望ましいと考えています。そのそれぞれの極の核となるのが、地域のコミュニティ空間だと思います。

たとえばヨーロッパを列車で巡ると、田園風景のなかのこんもりとした集落には、中心に教会と広場をもつ「広場村」が普通に見られます。対する日本では北山さんが挙げられた道、とく

に街道に沿って町や村ができている。そういう構造の空間でコミュニティの中心、つまりヨーロッパの教会や広場にあたるものは何かと、考えてみました。で、神社がそれにあたるのではないかと、着目してきたわけです。神社には山頂や中腹にある山宮と、麓の町や村には里宮があって、「道」が生活の軸となり拠りどころにもなっている。

もともと日本には、そういう町や村の姿があったと思います。しかし経済活動の優先とそれが引き寄せる人口の増加で都市の規模がどんどん膨れ上がり、その隅々にまでクルマを優先した道が張り巡らされ、発達したクルマ社会を背景に中心市街地の外側に新しい大規模な商業施設が誕生したことで、とくに地方都市において中心市街地の空洞化が一挙に進みました。いわば「郊外ショッピングモール型」で自動車・道路中心のアメリカ型の都市モデルだと思いましたが、そうして進んできてしまった都市を、何かもともとあった原点を大切にしながら、新しいかたちで展開していけないか、と、今日はそんなことを北山さんと探っていただきたいと思います。

北山——私は、明治時代初期には全国に20万社ほどの神社があり、それが当時の「自然村」、つまり地域コミュニティの数にほぼ対応していた、という広井さんが『ポスト資本主義』（岩波新書、2015）で展開されていた話が好きて、私の著作にも引用させていただいています。この自然村が、集落としては「ほどほど」のスケールじゃないかと思っています。人類学でいうと



北山恒

きたやま・こう—1950年香川県生まれ。法政大学客員教授、横浜国立大学名誉教授、建築家。横浜国立大学大学院修士課程修了。architecture WORKSHOP設立主宰。横浜国立大学大学院Y-GSA教授を経て法政大学教授。代表作に「HYPERMIX」（2018）、「洗足の連結住棟」（2006）など。受賞歴に、日本建築学会賞、日本建築家協会賞など。著書に『未来都市はムラに近似する』（彰国社、2021）、『モダニズムの臨界』（NTT出版、2017）、『都市のエージェントはだれなのか』（TOTO出版、2015）他。



広井良典

ひろい・よしのり—1961年岡山県生まれ。京都大学人と社会の未来研究院教授。専門は公共政策および科学哲学。東京大学大学院修士課程修了後、厚生省、千葉大学法経学部教授、マサチューセッツ工科大学客員研究員などを経て現職。著書に『無と意識の人類史 私たちはどこへ向かうのか』（東洋経済新報社、2021）、『人口減少社会のデザイン』（東洋経済新報社、2019）、『ポスト資本主義 科学・人間・社会の未来』（岩波新書、2015）他。

人間の脳が認識できる個体数が150くらいで、レヴィ=ストロースなどを読んでも、原始集落のスケールはそれくらいの規模なんですね。「大きい家族」くらいな感じで、みんな顔見知りで挨拶を交わすような関係性ですよ。このコミュニティスケールを、私は「ムラ」としています。

東京に住んでいると、家を出てから学校や職場に行くまでにまったく挨拶しない日があたりまえにある。けれども「ほどほど」のコミュニティスケールの村では、家を出て目的地に着くまでにも、何人かの顔見知りと挨拶を交わす。そういうスケール感って、大切じゃないかと思えます。ですから広井さんのおっしゃるように、日本にも顔見知りのなかで暮らし、お祭りをやったり婚礼や葬式をしたりという、人間的なスケール感のなかで営まれてきた共同体もあったわけですね。しかし近代になって道は人間が通る空間ではなくなり、A点とB点を効率よくつなぐ経路になってしまった。そのためにクルマが優先された。私は四国の高松市に生まれ育ちましたが、子どもの頃の道路は舗装されていなくて、クルマもそんなに走っていなかった。ですから、本来人間のための道がクルマ優先になってしまったのは本当に戦後以降、この70年ほどのことなんですね。

都市の商店街に託された未来への夢

広井——高松市といえば、私が『人口減少社会のデザイン』でも紹介している高松丸亀町商店街が、商店街再生の成功事例として有名ですね。定期借地

権をうまく利用した商店街の活性化にとどまらず、高齢者向けの住宅から医療施設、高齢者が楽しめる娯楽施設など、福祉都市的な性格をもっている点で、コミュニティ感覚のあるこれからのまちづくりの一つのお手本になると考えています。（本誌no.133、特集「エリア・スタディ・シリーズ」でも紹介）

北山——そうですね、高松丸亀町商店街は一般的なものより高いアーケードを採用したことで、明るく開放感のある商店街が実現しています。19世紀前半には、パリという都市空間で、新しくパサージュが生まれています。当時最新の素材である鉄の骨組みにガラス屋根をつけた小径で、高級品や流行品を扱う店が軒を連ねていました。端的にいえば、丸亀町商店街のようなアーケード式の商店街ですね。このパサージュができたことで人々がそこに集まり、挨拶や社交をする場所が都市のなかに生まれました。その後ドイツの思想家であるヴァルター・ベンヤミンは、著書『パサージュ論』のなかで、出会いの場であるこのパサージュはユートピアのような共同体を体現する空間だとします。そしてこのパサージュこそ、資本主義からの目覚めを内包し、資本主義によってはかなえられない人々の夢、——未来のコミュニティを胎動させているのではないかと書いています。この京都にもアーケード街がありますが、東京にもクルマを入れないようにしたアーケード街がそれなりの賑わいをつくっていますし、丸亀町商店街もそうしたパサージュの空間を核として人が集まる場所をつくっている。そこには何か「ほどほど」の人間

関係もできているように思われます。広井——日本には、とくにアーケード付きの商店街が多いように思われます。これは戦後の1950～60年代に、全国にわっと広がった。ヨーロッパには屋根がなくても歩行者専用の空間が結構ありますが、日本の場合、アーケードの下はだいたいクルマが通れなくて、歩行者専用とアーケードがセットになっています。ある外国人の研究者は、日本でこんなにアーケード街が広まったのは、お寺や神社の参道のイメージがあるのではないかと分析しているほどです。でも今では、地方都市のそうしたアーケード街もシャッター街化してしまっている。

私は、その再生には二つのポイントがあると考えています。一つは今言ったように、クルマが入らない歩行者だけの空間にすること。もう一つは地域でのヒト・モノ・カネの循環、最近よく言われるようになった「地域内経済循環」です。高齢化はある意味でそのチャンスで、高齢化が進む現在では、郊外の大型商業施設にクルマで買い物に行くこともできない世代が増えつつあります。高齢者にとっては近くに商店街があったり、丸亀商店街のように商店街のなかに住むことが非常に重要になってきている。一方、最近では若い世代が地方都市にIターンやUターンして、カフェを開いたりパン屋を始めたりと、ローカルな暮らしへの関心も高まっています。私は「商店街の復権」の時代と言っているのですが、そうした「ほどほど」の商店街が全国各地で再生していけば、その地域のなかで経済がうまく循環していくのではないかと

と、希望的にそう考えています。北山——私は法政大学に在籍していた時、同じ大学の陣内秀信先生と一緒に、学内に「江戸東京研究センター」を立ち上げました。ここでとくにこだわったのは、江戸と東京をワンワードでつなぐこと。江戸と東京の間には、大きな文明の切断面があります。それまでの伝統的な文明を「維新」の名の下にヨーロッパ文明へと転換し、それまでの日本にはなかった新しい言葉をつくりながら社会システムを新しくして、産業革命の歴史に連なる「産業を中心とした社会」へと飛び込んでいった。それは確かに大きな切断ではあったけれど、改めて「江戸東京」とワンワードにすることで、変わらないで継続されてきたことも見えてくる。切断と継続、江戸東京研究センターではその両方を見ようとする研究を進めてきました。

とくに建築や都市に注目すると、そこにはコモンズという概念がクローズアップされてきます。明治以降、主に徴税を目的として、日本の土地はすべてその所有者を特定するという近代的な土地所有制を進めてきました。とくに戦後は租税法が確立し、そのおかげで土地の交換も自由になり、経済活動も盛んになりました。しかし「江戸東京」をつなげてみるとそれに対しての抵抗感が、コモンズ、この場合はまさに「共有地」の概念としてずっと残ってきていることがわかります。その顕著な表れがアーケード商店街ですね。昔の商店街には「三尺ルール」というのがあって、店の前の三尺（約90cm）は商品を並べてもよかつたらしい。と

ころが今の道路交通法では、即違法となってしまう。アーケードの下では今もそのあたりがちよっとゆるくて、江戸時代以来の共有地の概念が残っているような気がします。そういうコモンズを、なんとかしてもう一度再生できないか、と考えています。

経済優先から豊かな生活へ、転換期を迎える都市像

北山——コモンズでいうと、広井さんが挙げられた神社も昔からの共有地で、みんなが大切にしたいという想いがある。そうした共有地が人をつなぎ、なんとなく顔見知りの、「ほどほど」の人間関係をつくる。まったく知らない人なら競争になって、勝てば押しつけてしまえるけれど、なんとなくでも知っている人にはちょっとケアの手を差し伸べたくになりますよね。コモンズは、そういう関係性を生活空間につくっていくきっかけになるんじゃないでしょうか。

広井——シャッター街になっているような商店街の問題の一つには、後継者がなく放置されてしまう、ということがあります。じつは農業も同じで、後継者がいなくて耕作放棄地になってしまう。つながりが切れていく構造は同じで、つまり家族を越えた承継ということが日本では非常に難しい。要は土地問題が根っこにあるわけです。これに対して「東京R不動産」などの新しいタイプの不動産業では、血縁や地縁を超えた不動産のバトンタッチを始めています。さらに点ではなく、エリアイノベーションのように面としてコーディネートすることも重要になってく

る。先ほどの丸亀商店街では、定期借地権による店舗にはどんどん新しいお店が入って代替わりしていくけれど、土地を貸している人たちにはcommons的な連帯意識が強くあって、それがうまく機能している。

北山——商店街の上層階には居住地区をつくって新たに定住する人も増えるから、生活圏の層も厚くなる。商店街に生活圏があるというのは重要ですね。

広井——都市部では商店街、地方では鎮守の森が、私にとっては二大テーマで、どちらもcommonsなんですね。この二つをどう立て直していくかは、とても重要な問題ではないかと考えています。

北山——広井さんはご著書で、現代社会を上から個人・コミュニティ・自然からなる三角形として描かれ、近代の都市が土台となる自然から個人やコミュニティを切り離すものだったとすれば、これからの社会は再び「自然に着陸」させるものになるだろうと書かれています。鎮守の森も自然への着陸ですね。そもそも「都市」という言葉は明治以降につくられていますから、すでに自然からの離陸を含んでしまっている。ムラの語源がムレ(群れ)であるように、それ以前の「人が集まって住む」という概念と、経済活動を行う産業都市というまったく異なる概念が、やみくもに接ぎ木されてしまった感じですか。

ですから明治の都市計画では、国会議事堂はもちろん、銀行も、役所も、駅舎も、公民館も、みんな西洋建築で建てることで、新しい制度への転換を

目に見えるかたちで知らしめたわけです。それが戦後は都市空間そのものが経済活動の体現となり、人間が1時間も2時間もかけて通勤し、そこで「24時間働けますか」なんていう忙しい生活をさせるような社会システムに沿った空間をつくってきてしまった。しかしコロナ禍でリモートでの仕事が増えてくると、なぜあんなに毎日往復通勤していたんだろう、とか、なぜ9時から5時の勤務時間にあんなに縛られていたんだろう、と不思議にすら思われますよね。

広井——コロナ後の生活を「ニューノーマル」なんて言いますが、もともとがノーマルだったかという、むしろアブノーマルだったんじゃないか、と(笑)。

北山——アメリカ型の都市モデルはシカゴから始まっていて、20世紀初頭にはシカゴ学派といわれる都市社会学が生まれ、そこで経済効率にもとづいてつくられた都市の様態を調査・研究しています。第二次世界大戦で焼け野原となった日本の主要都市が、戦後ほとんどこうしたアメリカ型の都市に変わり、今、われわれはそこに暮らしている。陣内さんがよくスローライフの

例で挙げているイタリアの都市はルネサンスから続く都市構造だし、日本と同じように焦土と化したドイツは、歴史の継続性を大切にして、壊された都市をなるべくそっくりそのまま作り直した。だからヨーロッパには人口40から50万人程度の、気持ちのいいスケールの都市がたくさんあるけれど、日本は歴史も時間も平気で切断してしまっただけです。

広井——ちょうど北山さんと同じいわゆる団塊世代の多くは企業戦士になって、1978年にはエズラ・ヴォーゲルの『ジャパン・アズ・ナンバーワン』などという本が出るほど世界的に賞賛された。それが強い成功体験となり、昭和のやり方を続けていけば日本はうまくいくという意識が浸透しました。でも平成時代の途中から人口減少社会が到来し、今までの経済一辺倒のやり方だけではまずいと思う人も増えていきました。

北山——広井さんはすでに2001年に『定常型社会 新しい「豊かさ」の構想』(岩波新書)を刊行され、経済成長ではない、今でいう「ゼロ成長社会」で十分に豊かに暮らすありようを提言されました。その鍵となる要素の一

つが「相互扶助」ですが、2009年には『コミュニティを問い直す つながり・都市・日本社会の未来』(ちくま新書)を出され、これはわれわれ建築家にも大きな衝撃を与えました。建築教育も80・90年代は拡張・拡大を支える建築・都市概念でしたが、今ではガラッと変わって、地域やコミュニティをどうつくるかということが主題になっている。定常型社会を支える空間をつくるための障壁となるのは、やっぱり土地私有の問題ですね。今大学では現在の制度を乗り越えて、われわれが望む未来型のコミュニティを育む都市空間をどうデザインするかをテーマとして、検討を進めているところです。

未来の都市は「ムラ」に近似する

広井——都市のありようを考える時、建築やデザインの力はものすごく大きいと感じます。地方都市の再生については、いまだに産業や工場を誘致する発想が強く、私はいくつかの省庁の委員会に参加したりもしていますが、なおそうした発想が根強い。しかしこれからは従来型の産業誘致じゃなくて、町の空間を具体的にどうデザインしていくかがより重要になってくると思います。

北山——大学では、最近自分の出身地に戻ってそこで仕事をしていきたいという卒業生が増えていて、私はそこに希望をもちます。空間をデザインすることは、ランゲージ、言葉をつくることと同じで、その都市のプライドをつくったり、祭りのようなイベントなど、都市や生活のリズムをつくっていく活動なんですね。都市のつくら

れ方にはやっぱりビジョンが必要で、それを具体化するのには建築やデザインです。都市や空間や空気や水はもともとがcommonsですからみんなのもので、「俺の土地だから勝手にやっていたらいいだろう」というものではない。今の日本の都市には、みんなが共感できる未来像が描かれていない。そこが一番悲しいところです。

広井——私は冒頭でもちょっと触れたように、コミュニティにも「農村型」と「都市型」があると思います。日本社会はこれまでずっと農村型で、空気を読むとか村度するという同質的な傾向が強くありましたが、これからは独立した個人が集団を超えてゆるくつながり合うような、都市型コミュニティが重要だと思います。ですから「ほどほど都市」には、べったりくっつくのでもまったく離れるというのでもない、まさに「ほどほど」の人間関係という意味合いもある。今の日本の社会は、どちらかに極端過ぎるんですね。北山——ちょうど今、私は東京と京都の二拠点居住を始めようとしていて、教え子の建築家に京都の町家の改修を手伝ってもらっているんですが、彼が京都で生活を始めた時、町でよく知り合いに出会うようになったと言います。都市空間がそれほど広くないし、市街地には小さな個人商店が町家と混在しています。どこかの店で飲んでいるときと誰かに会って、「先日はあそこで飲んでたろう」なんて言われて、何かつながっている感じがするんだそうですね。東京ではまずないことですよ。逆に町が小さすぎると、監視されているような感じになってしまう。関





係をもたない人間同士が衝突し合うように生きるのではなく、かといってあまり窮屈でもなく、お互いの距離を測り合いながら生活できる「ほどほど」のコミュニティスケールというのは、きっとあるんじゃないかと思います。

広井——規模感もちろんです。京都には鴨川が流れていて、河畔にはいつも人が憩っている。川床とか納涼床かわのまと呼ばれるような、夏の川を楽しむつらえも残っています。加えて周囲の山も都市景観の一部になっている。エコロジカル(生態)都市といったイメージでしょうか。

北山——京都はお寺や神社が多くて、それが戦火で焼かれずに残っているから、時間的に深度をもった空間が随所にある。それが鴨川や、市街地を取り囲んでいる山々ともつながっていると感じます。

広井——京都の人口は現在140万人ほどですが、これは1970年くらいからほぼ変わってなくて、それでも一定の活気ももち続けていますから、ある種の定常型社会が実現しているとも言えるんですね。今は東京一極集中というよりも、「札幌広福」と呼ばれる札幌、仙台、広島、福岡の人口増加率が多くて、そういういくつかの大きな極に人が集まりつつあります。いわば「少極集中」になっているのが日本の現状ですが、そうした極がもっと増えて「多極」になり、しかもそうした極は数十万規模のものから1万人、あるいはもっと小さい町や村まで含めて多層的になっているという、「重層的多極集中」がいいんじゃないかと思います。

全国の市町村に、コミュニティの核

として何が重要かアンケート調査をしてみると、商店街やお寺や神社、公園などと共に、少子高齢化に対応した学校や福祉施設、医療施設なども挙がってきます。「防災コミュニティ」のようなセーフティーネットもその一つですね。

私がここ10年ほど取り組んできた「鎮守の森コミュニティ研究所」では、鎮守の森を拠点に小水力発電などの自然エネルギーを整備していくプロジェクトを進めています。埼玉県の秩父市では昨年、約120世帯分の電力をつくる50kwの小水力発電所ができ、それが地元の自然への愛着や、山への植林活動へとつながり始めています。そんなことも、コミュニティの核になっていくんですね。

北山——発電の規模感がコミュニティ規模になっていて、エネルギーに紐付けられた人間関係ができるのがいいですね。私はそういう人間関係のある空間を「ムラ」という言葉に託していますが、それは「ほどほど」のスケールをもったコミュニティということですね。ムラは地方にも、都市の中にも必要だと考えています。そうしたたくさんさんのムラが、それぞれの多様性をもつことが重要ですね。日本にはせっかく豊かな自然があるのだし、それぞれの地域はそれぞれの歴史を育んできているわけですから、それをちゃんと認識して色付いていくようなムラが日本中にできるといい。そうすれば、「あそこに住んでみたい」と思えるような選択肢の広がりと共に、生活の多様性や豊かさも生まれてくるのではないのでしょうか。



「ほどほど都市」の風景—④

京都市中京区。

烏丸御池の裏路地にある「COFFEEユニオン」は、1953年創業以来、地元の人々に愛され続けている喫茶店。町家を改修した店内は奥に向かって細長く、中庭だった場所も客席として増築、半透明のスレートから自然光が注ぐトップライトが施されている。常連と思しき中高年の男性客が多いが、時折折れ込む旅行者にも分け隔てなく、適度な距離感と親密さがある接客に、都市的な心地よさが感じられる。

都市の緑
3
表彰

緑がつなぐ町・人・暮らし

一般財団法人第一生命財団では、公益財団法人都市緑化機構と共に、「緑の環境プラン大賞」(共催)、「緑の都市賞」「屋上・壁面緑化技術コンクール」(いずれも特別協賛)の、「都市の緑3表彰」に取り組んでいる。これらは、都市緑化を通じ、環境保全、ヒートアイランドの抑止、二酸化炭素の削減、緑のまちづくりや植栽活動を通じたコミュニティの形成などに貢献する事業を支援、顕彰するもので、全国各地で、すでに多くの取り組みが実績をあげている。これらに選出された事業のなかから、とくに都市環境の向上やまちづくりに資する事例を取材し、緑を通じたまちづくりを紹介していく。

取材・文:斎藤夕子 photo:坂本政十郎

第20回 「SAKURA MACHI Kumamoto」 屋上・壁面緑化技術コンクール 国土交通大臣賞:屋上緑化部門

2019年9月、熊本市中央区桜町に複合型商業施設「SAKURA MACHI Kumamoto」(以下、サクラマチ)がオープンした。同施設は、1969年に開業し、当時、東洋一の規模を誇るといわれたバスターミナル「熊本交通センター」建て替えを中心とする、中心市街地再開発事業として完成したものの。バスターミナル機能はそのままに(停留所名は「熊本桜町バスターミナル」に改称)、スムーズな動線、バリアフリー化などに配慮してリニューアル

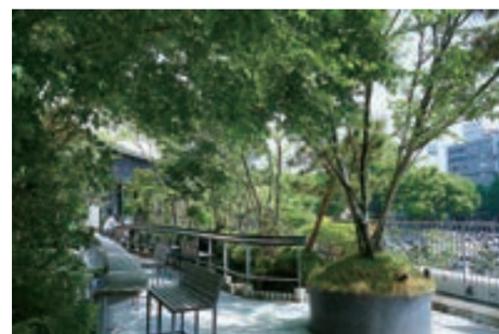
されると共に、地下1階、地上5階の施設内には、ファッションやコスメなどのショップの他、飲食店、シネマコンプレックス、スポーツジム、保育所などが入居。また、コンベンションホール「熊本城ホール」、ホテル、マンションなども併設され、一帯は新たに生まれ変わった。

サクラマチを運営する九州産交ランドマーク株式会社営業企画推進プロジェクト部長の片岡隆博さんは、事業の経緯を次のように教えてくれる。

「バスターミナルの老朽化、耐震性やバリアフリー化の課題などから、建て替えの必要性が検討されていました。一方、熊本市でも中心市街地活性化を目的に、バスターミナルに隣接する花畑公園・花畑広場一帯を歩行者空間として整備する計画や、コンベンション



上●中心市街地に誕生した緑のオアシス「SAKURA MACHI Kumamoto」
右●フロアごとに設けられた「ストリートビューテラス」。植栽の木陰にはカウンターテーブルとスツールが設置され、一休みするのに格好の空間



左●屋上庭園「サクラマチガーデン」。春陽庭をモチーフにした庭園の水景越しに熊本城を望む。「熊本城と庭つづき」を実感できる景観軸
上●築山の頂上からも、熊本城がよく見える

ホールの開設などの計画がありました。そこでこうした動きと連動し、熊本都市計画・第一種市街地再開発事業の一環として取り組みました」

●熊本の歴史と文化をつなぐ 屋上庭園

サクラマチはバスターミナルという公共交通拠点であることも含め、商業施設でありながら、市民に開かれた、公共的な空間としての役割も担っている。そしてこのことを表現しているのが、施設全体を覆う緑化空間の豊富さだ。屋上庭園「サクラマチガーデン」を含め、2~6階までがひな壇状に連なる「ストリートビューテラス」には、

高木を含む多彩な草木が植栽され、まるで立体的な公園のように見える。建築面積27,206.32㎡のうち、緑地として整備した空間は10,765.34㎡、うち緑被面積は6205.2㎡に及ぶという。これにより施設の東側、中心市街地方向の花畑公園・花畑広場、西側の背後に聳える金峰山、そして北側の熊本城とその城郭を形成する茶臼山が、緑を介して、サクラマチと一体的に感じられる。

とくに、サクラマチガーデンでは「熊本城と庭つづき」をコンセプトに、地上約30mの高さを生かし、熊本城を視覚的につなぐ新たな景観軸を創出。また、屋上とは思えないほどに豊かな

緑化空間は、かつて当地にあったとされる細川家ゆかりの庭園「春陽庭」にならない、借景・水景・築山・舞台という四つの要素を取り入れ、熊本城下として発達してきた町の歴史と文化を感じさせる設えとした。

「サクラマチガーデンには二面性をもたせています。西側は池と水路を中心に緑のなかを回遊できる、春陽庭をモチーフにした日本庭園風に。南側と市街地方向のテラスについてはカフェスペースも配し、お客さまがゆっくり憩い、安らぎ、くつろげるような空間として整備しました」(片岡さん)

植栽された草木はおよそ200種、3000本。「サクラマチ」という名称だ



●庭園内を回遊できる小道。この辺りは、シーズンになればアジサイに彩られる



左●水深15cmの池に入り、水遊びをする親子。水に入ることも自由で、暑い日には市民プールかと思うほどにたくさんの子もたちが水遊びに興じているという
上●庭園の奥に配された木陰のベンチで談笑するグループ



上●サクラマチガーデンの南側のテーブルスペース。カフェスタンドもあるが、持ってきたお弁当を食べたり、休憩したりと、自由に利用できる

右●サクラマチガーデンの一角には滑り台があり、子どもたちが遊ぶ姿が絶えない

けに、もちろんサクラも数品種植えられているが、早春のウメ、初夏のアジサイ、秋は紅葉と、四季を通じて色とりどりの草花を楽しみ、季節の移ろいを感じられるよう配慮しているという。

また、サクラマチに隣接する「熊本城ホール」屋上にも緑化を実施。こちらには普段は関係者以外の立ち入りはないが、屋上緑化による施設の省エネやヒートアイランド抑止効果などに配慮している。ただ、今後はその眺望を生かし、星空の観察イベントなどにも利用していく計画があるという。

「くまモン盛土」で オリジナリティあふれる緑化

それにしても、建物の屋上にこれだけの緑を実現するには、建物の構造自体も強固にする必要がある。ウメやサクラを始め、アカマツ、クロマツなどの高木も多く植栽されており、これらの樹木が育つために必要な土だけでも、建物には相当な荷重がかかる。また、これほどの植栽を常に良好に保つための労力やコストも、相当かかっていることは間違いない。

「当然、建築コストも、植栽の維持管

理の面でもコストはかかります。ですが、このコストを負担してでもこうした自然の環境を実現し、そのなかで、訪れた方々にゆっくり寛いでいただきたい。そのことが、私どもの施設だけではなく、熊本市の中心市街地の魅力向上につながるものとして取り組んでいます。これほどの緑化は、施設運営の合理性だけでは実現が難しいからこそ、それがサクラマチ独自のストロングポイントだとも考えています」(片岡さん)

植栽に関して、サクラマチオリジナルの工夫もある。その一つが「くまモン盛土」だ。高木を植えるためには、それなりの土壌厚が必要で、一般的に



●樹木の根本をリュウノヒゲマットで覆うことで、立ち上がり部分を自然に感じさせる「くまモン盛土」



は必要な箇所に盛土をするのだが、その根本、コンクリートで造作した立ち上がり部分が見えてしまうと、どうしても人工的な印象が際立つ。そこで、麻土嚢を積み上げて必要な土壌厚を確保し、さらにその表面を、リュウノヒゲをシート状に植えた「リュウノヒゲマット」で覆うように固定。フサフサとしたリュウノヒゲが丸いシルエットを描く様は可愛らしく、ご当地キャラクター「くまモン」をイメージさせることから「くまモン盛土」の愛称がついた。家族連れも多く訪れる施設であることを考慮した工夫であると共に、工期の短縮と緑化の品質向上に大きく貢献しているという。

時代のニーズを先取りしたオープンスペース

ゴールデンウィークを控えたこの日、熊本市では「くまもと花とみどりの博覧会」が開催されていた。サクラマチ周辺も会場の一つとなっており、花畑公園との間に伸びる歩行者空間「シンボルプロムナード」には県産花弁約7万株を使用した巨大花壇や花を使った立体的なオブジェが展示され、華やかな空間が誕生していた。ウィークデーながら訪れる人は多く、サクラマチガーデンにも、花とみどりの博覧会と合わせて訪れたらしい家族連れや若者グループの姿がある。屋上庭園内を歩くと、木陰のベンチで会話に興じる人々、熊本城のビュースポットで写真を撮るカップル、池で遊ぶ親子など、緑の空間を思い思いに楽しんでいる。

また、各フロアに設けられた「ストリートビューテラス」には、植栽に合わせてカウンター式のテーブルとスツールが設置されており、パソコンを開いて仕事をするビジネスマン、一人読書を楽しむ人の姿も見られた。

「サクラマチのオープン」は2019年9月なので、以来、4、5カ月は通常通りの営業ができましたが、すぐに新型コロナウイルス感染症が拡大してしまい、計画通りの運営が厳しい状況に。それでも、当施設は屋外空間が充実し



左●サクラマチ2階、バスターミナルと連動したコンコース

上●施設内に展示されていた模型。ひな壇状のストリートビューテラスの構造がよくわかる

ていることから、比較的、お客さまに利用していただきやすい環境ではあると思います。またテラスや屋上ではリモートワークをされる方の姿もよくお見受けしますので、ある意味、先進的な空間として整備されたのかな、とは思っています」(片岡さん)

また、工事中の2016年には、熊本地震にも見舞われた。旧施設の解体工事中であったため、施設としては大きな被害はなかったが、これを受け、一部計画の見直しが行われた。耐震強度のさらなる向上を始め、一時避難所として1万1000人が3日間、サクラマチに滞在できるようにするなどの性能強化を実施した。この他、被災時に片岡さん自身が避難所や狭いクルマの中で不安な日々を過ごした経験から、施設内に明るい自然光を取り入れたい

と、施設中央、コンコース上の屋根をガラスのトップライトに変更したそう

だ。熊本桜町バスターミナルは、熊本空港からのリムジンバスを始め、各種高速バス、熊本市圏のほとんどの路線バスが発着する交通の要衝だ。それだけにサクラマチは、市内からのショッピング客はもとより、国内旅行者、ビジネス、インバウンドを含め、国内外からの、多くの人々が集うことを前提に計画された施設でもある。オープンから3年、新型コロナウイルス感染症の影響から、まだ、計画時の集客は戻っていない。だが、その間にもサクラマチの「ストロングポイント」である緑の空間は順調に成長し、中心市街地の緑のオアシスとしての魅力も、いっそう増しているようだ。今後、より多くの人々が心置きなく、その魅力を満喫できる日が待ち遠しい。

緑化技術の概要

作品面積	10,765.34㎡
設計上の荷重条件	2,000kg/㎡(成長分見込み)
実際の荷重	1,200kg/㎡
階数	2,3,4,5,6階屋上、熊本城ホール屋上、駐車場棟屋上
土壌厚	200～1,400mm
土壌の種類と名称	人工軽量土壌
土壌の湿潤比重	1.0
植栽数量	高木：460本 中木：410本 低木：2,251本 地被：リュウノヒゲマット約750㎡、芝生約1,835㎡
灌水方法	年間タイマー付き 点滴式自動灌水



●併設された「熊本城ホール」の屋上も一部緑化されている

噂の

「駅前」探検

第13回 御茶ノ水駅

今尾恵介

いまお・けいすけ●1959年横浜市生まれ。フリーライター。旅行ガイドブック、地図・旅行関係の雑誌や地図・鉄道関係の書籍の執筆を精力的に手がける。(一財)日本地図センター客員研究員、(一財)地図情報センター評議員など。著書に『駅名学入門』(中央公論新社、2020)、『地図帳の深読み』(帝国書院、2019)、『不思議地名巡り』(ちくま文庫、2020)他多数。

イラストマップ:小夜小町

子どもの頃、電車の絵本に描かれたある風景が脳裏に深く刻み込まれた。オレンジ色の電車と黄色い電車が立体交差して走っており、下の方には川のすぐ手前で地上に姿を見せた赤い地下鉄も見える。ここが御茶ノ水駅の東側であることはだいぶ後で知ったが、大学受験でこの駅を訪れ、帰りに聖橋口から神田川を見下ろした時、思いがけず絵本で見た風景を発見して嬉しかった。

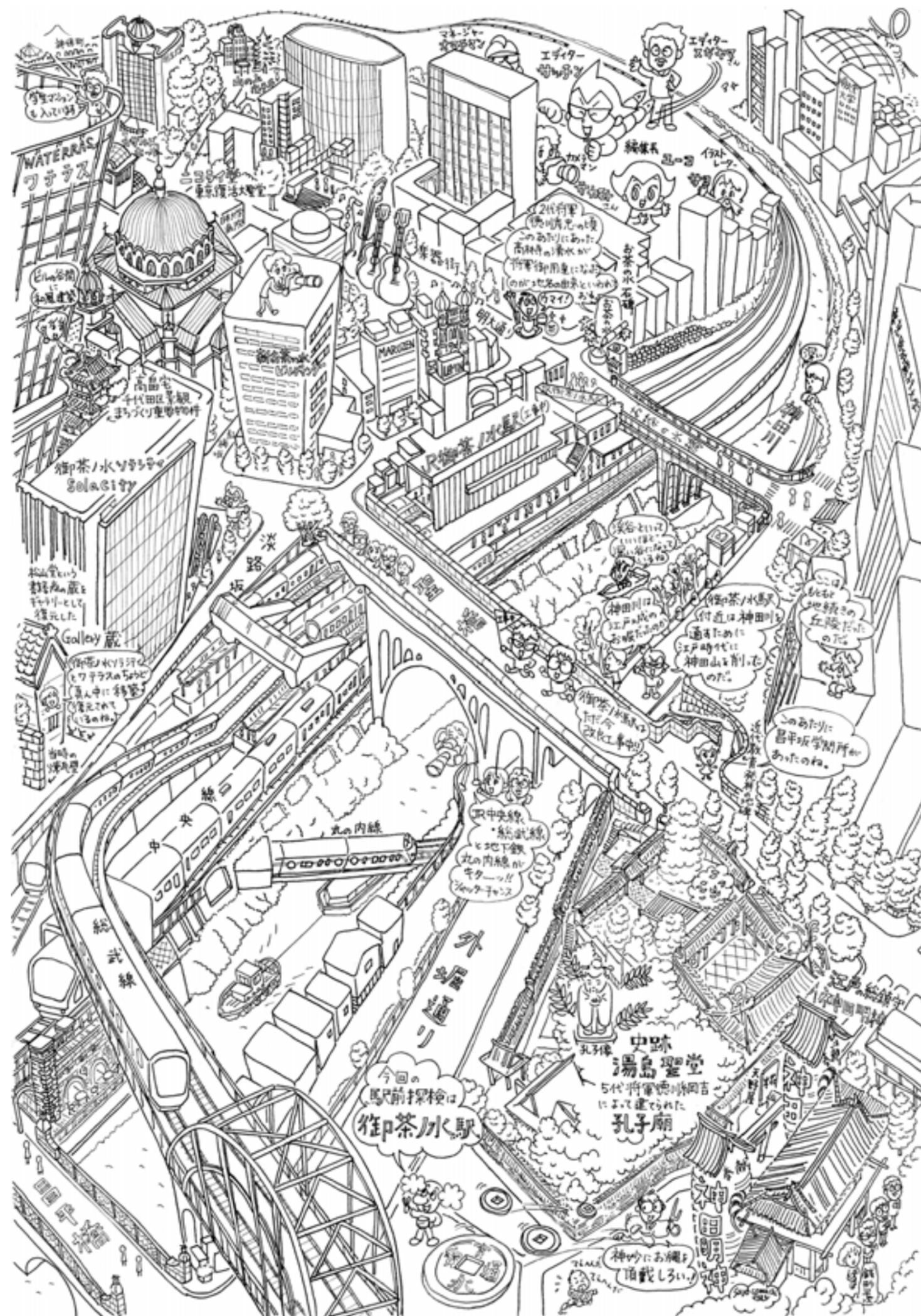
学生時代から出版社に在籍した13年間、御茶ノ水駅には毎日のようにお世話になったが、現在は大々的に改造工事中である。長らく利用した狭くて古い階段はいつの間にか姿を消し、エスカレータが設置された。大袈裟でなく日本一だと密かに思っていたプラットフォームからの眺めは工事の足場のため堪能できないが、完成したら元の「絶景」を拝めるだろう。四季折々にいろいろな花が咲き、まさに新緑から紅葉までを楽しむことができ、雪が降りし

御茶ノ水という学生街という印象が強いが、駅周辺には、江戸三大祭りの神田祭が催される神田明神、徳川綱吉が儒教振興のために創建した孔子廟のある湯島聖堂、日本最大のビザンチン建築ニコライ堂(正式名称東京復活大聖堂教会)などの宗教関連の建物も多い。また、日本サッカーの歴史を紹介する日本サッカーミュージアムや和紙・折り紙・千代紙がテーマのお茶の水おりがみ会館、明治期の近代水道の歴史を紹介する東京都水道歴史館、殿堂入りした名選手の活躍を偲ぶ野球殿堂博物館、拷問・処刑具の展示で知られる明治大学博物館とユニークな博物館がそろっていることでも有名だ。モダニズム様式による駅舎のデザインは御茶ノ水駅が最初だといわれているが、周辺で進む再開発プロジェクトに合わせて、御茶ノ水駅も大規模改良工事の真っ最中だ。

きる日の神田川も風情があった。ところで、「御茶ノ水」は駅名として見れば珍しい部類だ。日本の駅名の多くは公式地名だが、こちらは駅の周辺を指す通称である。所在地は東京都千代田区神田駿河台で、神田川の対岸は文京区湯島である。一方で御茶ノ水という地名の由来は有名だ。付近に良質の水が湧いており、将軍のお茶のために用いたことによる命名という。駅の存在のため現在でも通用度は高いが、あくまで通称なので範囲は明確でない。御茶ノ水駅が開業したのは日露戦争の最中である明治37(1904)年12月31日である。その翌日にあたる同38年の元日にはロシアの旅順要塞が陥落というタイミングであった。開業当時の駅は御茶ノ水橋の西側で、所在地は東京市神田区駿河台鈴木町(現神田駿河台二丁目)。現在の「お茶の水交番」の付近である。

なぜ神田や駿河台といった公式地名

でなくて「御茶ノ水」に決めたのだろうか。ちなみに神田駅が開業するのは大正8(1919)年で、神田区内では御茶ノ水が初の停車場であったから、この駅が神田を名乗ってもおかしくない。決定の経緯を記した文書は見ることがないので想像だが、「名所」だからこそ採用したのではないだろうか。これには、御茶ノ水駅が開業した2年後の明治39(1906)年に開業した水道橋という駅名もヒントになる。同駅も所在地は神田区三崎町河岸(現神田三崎町二丁目)で、神田川を隔てた北岸も小石川区市兵衛河岸(現文京区後楽一丁目)で、水道橋という町名はない。駅名になった橋は神田上水を江戸の中心へ送るために架けられた神田川の樋である。これが水道橋と呼ばれ、江戸の名所になった。そもそも開業当時の中央本線は甲武鉄道という私鉄であったから、少しでも利用促進のために「名所」を採用したと考えてもおかしくない。



甲武鉄道は明治22(1889)年4月11日に新宿～立川間を開業、8月には八王子まで延伸した。その後は都心方面を目指す。ところが一直線に線路を敷けた武蔵野台地とは大違いで、新宿以東は江戸時代以来の密集市街地が多い。そこで特別な許可をもらって外堀沿いに線路を敷設することになった。最初の延伸開業は明治27(1894)年に牛込駅(現飯田橋駅付近)まで、翌28年には飯田町駅まで延伸している。

飯田町駅は昭和8(1933)年に旅客営業を廃止(平成11年に駅を廃止)するまで長距離列車の始発駅で、昭和5(1930)年10月の改正時刻によれば、下りはここから1日8本、甲府、長野方面行きが発車していた。八王子行きなどの近距離は新宿始発だったので、けっこう閑寂な雰囲気だったのではないだろうか。その中の1本は、塩尻経由で木曾谷を経て名古屋まで中央本線を完走する列車だった。朝8時50分に飯田町を出て甲府に13時35分、塩尻には17時30分、終点名古屋には23時31分と、実に14時間41分をかける。

御茶ノ水駅が開業する4か月前の明治37(1904)年8月21日には飯田町～中野間で電車の運転が始まった。これが現在のJR線で初めての電車であることから、中央本線のこの区間が「国電の創始」とされている。年末には御茶ノ水まで延伸するが、明治38(1905)年8月号の時刻表によれば、御茶ノ水～新宿間は「およそ7分間毎」に発車しているというから、すでにこの時期の利便性はかなり高かった。同区間の所要時間も18分で、現在の16分とあまり変わらない。

明治39(1906)年10月に甲武鉄道は鉄道国有法によって国鉄となったが

延伸工事は続けられ、同41年には昌平橋駅(仮駅)まで、同45年に万世橋駅まで延伸された(昌平橋駅は廃止)。同駅には赤煉瓦の立派な駅舎が建てられ、駅前には日露戦争の「英雄」として戦死した広瀬中佐の銅像も置かれた。後に東京駅が大正3(1914)年に完成すると、中央本線もこれに接続すべく延伸、同8年に神田駅を経て東京駅まで達した。この時に東京～名古屋間の中央本線は全通したことになる。

御茶ノ水駅にとって次の変化といえば昭和7(1932)年の総武本線の接続だ。それまでの同線は両国橋(現両国)駅を起点としていた。隅田川を越えて御茶ノ水と結び付けることで東西交通の軸が形成されたのである。全線が高架で、しかも秋葉原駅で高架の山手線のさらに上を跨ぐのでかなり高くなり、秋葉原の地平の貨物、2階の山手線と京浜線(現京浜東北線)、3階の総武線という3層構造がまた東京名物となり、戦前の鉄道絵本には必ず取り上げられる名所だったという話も聞く。

総武本線と接続するにあたって、御茶ノ水橋西側にあった旧駅を東側の現在地に移転した。この際に総武線と中央線(急行=現快速)の両電車が同じホームで乗り換えられるよう、駅の前後で立体交差させるなど線形が工夫された。同様な工夫がなかった戦後の錦糸町駅などとは対照的で、戦前の御茶ノ水駅の設計の良さが光っている。

戦後に登場したのが地下鉄丸ノ内線である。この路線は大正末期から「東京市営地下鉄」の路線として似た経路の計画があった。結局は主に財政的な理由から戦前には実現しなかったが、戦時体制で市などの免許を引き継いだ帝都高速度交通営団(営団地下鉄)が、東京

で2番目の路線として昭和29(1954)年にまず池袋～御茶ノ水間で開業した。丸ノ内線と命名されたが、それまで区別の必要がなかった既存の地下鉄は改めて「銀座線」と名付けられている。丸ノ内線のデビューは鮮烈だった。真っ赤な車両に白帯、そこに波模様の金属板が貼り付けられ、おまけに車内はサーモンピンク。両開きドアが実用化されたのもこの車両が最初である。

御茶ノ水駅は神田川の北岸の地下に設けられたが、同31年3月に淡路町まで延伸した時に、神田川を低く渡る橋梁区間がお目見えしている。中央本線の線路の下で、かつ神田川の上という位置取りは絶妙だが、もし川の下をくぐらせたとなれば、後に地上から長いエスカレータで到達することになった千代田線の新御茶ノ水駅並みの深いホームにするしかない。本郷三丁目駅から本郷台地を25パーミルの急勾配で下ってきた線路が、さらに神田川の下をくぐり、しかも駅をなるべく緩い勾配に抑えるという条件を実現するのは困難だっただろう。いずれにせよ、この短くて低い橋梁の存在が、一帯の景観に絶妙な「紅一点」を与えたことは間違いない。

丸ノ内線の地上出口には東京医科歯科大学が隣接しているが、かつてはここに東京女子高等師範学校があった。昭和7(1932)年には小石川区大塚町(茗荷谷)に移転しているが、昭和24(1949)年に新制大学としてスタートした際に命名されたのが「お茶の水女子大学」である。かつての所在地の通称地名を採用したことにより、知名度は全国区になった。「お茶の水」と平仮名交じりなもの、いかにも戦後の息吹を感じさせる。



JR中央線と総武線の下を地下鉄丸ノ内線が交差する photo:坂本政十賜

今号と関連する特集号をPick Up
(その他は特集タイトルのみ)

No.1	特集「都市の幹線道路」	(1984.2) 在庫切れ
No.2	特集「都市公園」	(1984.5) 在庫切れ
No.3	特集「都市と河川」	(1984.12)
No.4	特集「子どものための都市計画」	(1985.6) 在庫切れ
No.5	特集「都市と盛り場」	(1985.12)
No.6	特集「都市生活と神社仏閣」	(1986.5)
No.7	特集「住宅地の道路と家並み」	(1986.9)
No.8	特集「都市とヒューマンスケール」	(1987.3)
No.9	特集「都市と水辺」	(1987.7) 在庫切れ
No.10	特集「都市の景観」	(1987.12) 在庫切れ
No.11	特集「都市と防火」	(1988.7) 在庫切れ
No.12	特集「都市とアメニティ」	(1988.12) 在庫切れ
No.13	特集「都市と運河」	(1989.8)
No.14	特集「都市再開発とアーバンデザイン」	(1989.12)
No.15	特集「アミューズメントと都市」	(1990.3)
No.16	特集「高齢化社会と都市」	(1990.6) 在庫切れ
No.17	特集「私鉄と歩んだ都市」	(1990.9)
No.18	特集「都市とホール」	(1990.12)
No.19	特集「エコロジー都市」	(1991.3)
No.20	特集「新・集合住宅論」	(1991.6)
No.21	特集「新・リゾート論」	(1991.9)
No.22	特集「都市と商業空間」	(1991.12)
No.23	特集「都市の民俗誌」	(1992.3)
No.24	特集「都市と緑化」	(1992.6)
No.25	特集「公共建築のデザイン」	(1992.9)
No.26	特集「都市と高層ビル」	(1992.12)
No.27	特集「住宅の間取り」	(1993.3)
No.28	特集「都市と広告」	(1993.6)
No.29	特集「都市の上水道」	(1993.9)
No.30	特集「都市の保存」	(1993.12)
No.31	特集「ミュージアムと都市」	(1994.3)
No.32	特集「プレハブ住宅」	(1994.6)
No.33	特集「都市の色彩」	(1994.9)
No.34	特集「観光都市の条件」	(1994.12)
No.35	特集「都市と下水道」	(1995.3)
No.36	特集「マンションのメンテナンス」	(1995.6)
No.37	特集「都市と歩道空間」	(1995.9)
No.38	特集「ゴミとリサイクル」	(1995.12)
No.39	特集「住宅の水まわり」	(1996.3)
No.40	特集「都市の駐車空間」	(1996.6)
No.41	特集「橋のデザイン」	(1996.9)
No.42	特集「建築と木材」	(1996.12)
No.43	特集「輸入住宅」	(1997.3)
No.44	特集「都市と学校」	(1997.6)
No.45	特集「環境共生型まちづくり」	(1997.9)

No.46	特集「都市と情報化」	(1997.12)
No.47	特集「老いない住宅」	(1998.3)
No.48	特集「都市と駅舎」	(1998.6)
No.49	特集「住宅のコスト」	(1998.9)
No.50	特集「路面電車ルネサンス」	(1998.12)
No.51	特集「ヒトが集まる、まちがにぎわう—集客都市へ」	(1999.3)
No.52	特集「シルバー・ハウジング」	(1999.6)
No.53	特集「NPOとまちづくり」	(1999.9)
No.54	特集「地域のノード、公共施設の新潮流」	(1999.12)
No.55	特集「都市公園の未来」	(2000.3)
No.56	特集「まちづくりの新しいパラダイム」	(2000.6)
No.57	特集「島のまちづくりに学ぶ 沖縄編」	(2000.9)
No.58	特集「地域に開く大学」	(2000.12)
No.59	特集「危機管理のまちづくり」	(2001.3)
No.60	特集「保存—都市と建築、過去と未来をつなぐもの」	(2001.6)
No.61	特集「30代建築家の都市イメージ」	(2001.9)
No.62	特集「使う建築、使うまち—都市のストック活用法 国内編」	(2001.12)
No.63	特集「LETSのまちづくり」	(2002.3)
No.64	特集「『都心居住』のまちづくり」	(2002.6)
No.65	特集「都市はアートで刺激される」	(2002.9)
No.66	特集「ランドスケープ・デザインの新展開—地形を活かしたまちづくり」	(2002.12)
No.67	特集「スローライフとまちづくり」	(2003.3)
<ul style="list-style-type: none"> ●座談会 スローライフは都市を元気にする 陣内秀信+辻信一+長尾智子 ●インタビュー 地産地消、新しい自立の形 ●ルポ ニッポン、スローライフ・シティ ●ルポ 「スローライフ的」東京「癒し・くつろぎ・なごみ」スポット ●ルポ スローライフへの憧れと、グリーンツーリズムが出合う町—大分県安心院町グリーンツーリズム研究会 		
No.68	特集「サステナブルな都市“成長”政策—都市計画と長期ビジョン」	(2003.6)
No.69	特集「吉祥寺—住みたい町ナンバー1の理由」	(2003.9)
No.70	特集「緑の建物づくり」	(2003.12)
No.71	特集「都市と観光、新たな視点」	(2004.3)
No.72	特集「構造改革特区とまちづくり」	(2004.6)
No.73	特集「マルチプル/モビリティ コンパクトシティの条件」(2004.9)	
<ul style="list-style-type: none"> ●インタビュー 都市の魅力と交通の多様化—コンパクトシティ論から考える 海道清信 ●対談 中間域が「まち」を愉しめる 土井勉+秋山孝正 ●ケーススタディ 公共交通の活用がコンパクトシティを実現するか 岐阜市—路面電車存続問題で公共交通の意味を問い直す/福井市—歩行者優先の町「トランジットモール」を目指す/富山市—町の資源を生かして、さまざまなモビリティを提案する ●綴じ込みMap 自転車東京・大阪ぐるっとひとまわり ●連載 都市を拓いた人々・42 前橋 		
No.74	特集「都市の言説を巡る旅 10のキーワードから探る都市 [論] の現在」	(2004.12)
No.75	特集「マルチモーダルが都市を楽しくする [ヨーロッパ編]」(2005.3)	
No.76	特集「路地・横丁空間からの都市再生」	(2005.6)
No.77	特集「公共空間、新たな視点」	(2005.9)
No.78	特集「小さな町の豊かな暮らし」	(2005.12)
<ul style="list-style-type: none"> ●インタビュー イタリアの魅力的な小さな町 陣内秀信 ●ルポ ヨーロッパのコンパクトシティ—小さいながらも愉しいわが町 ●サーベイ 発見! 「小さな町の豊かな暮らし」—「観光」と「生活」を両立させる町、鎌倉vs金沢 神奈川県鎌倉市—歴史と文化の多様性を生かした、魅力ある住みやすい町の追求/石川県金沢市—革新し続けるからこそ生き続ける伝統。観光と暮らしを両立する「加賀百万石」のまちづくり ●ルポ 日本型コンパクトシティの現場を訪ねる ●コンパクトシティ、「賢い縮小」の必要性 服部圭郎 		

No.79	特集「都市の「良質な」居住環境」	(2006.3)
No.80	特集「エリア・スタディ・シリーズ わが町流まちづくりのすすめ①」	(2006.6)
No.81	特集「「安全・安心のまちづくり」を考える」	(2006.9)
No.82	特集「エリア・スタディ・シリーズ 「ロハス」時代の、「素顔のまま」でまちづくり」	(2006.12)
No.83	特集「ジェイン・ジェイクブスの宿題」	(2007.3) 重版
No.84	特集「サイクリング・シティの可能性」	(2007.6)
No.85	特集「地図とまち—見る・歩く・つくる」	(2007.9)
No.86	特集「エリア・スタディ・シリーズ わが町流まちづくりのすすめ②」	(2007.12)
No.87	特集「「美味し国」の景観論—フランス、都市景観の新たな創造」	(2008.3)
No.88	特集「美味しいまちづくり」	(2008.6)
No.89	特集「都市を愉しむいくつかの方法」	(2008.9)
No.90	特集「シュリンキング・シティ—縮小する都市の新たなイメージ」	(2008.12)
<ul style="list-style-type: none"> ●インタビュー 縮小する都市とファイバーシティ 2050—縮小に「未来」はあるか 大野秀敏 ●インタビュー シュリンキング・シティ、スタディーズ 「都市をたたむ」アーバンデザイン 団塊の世代の都市問題 梶庭伸/共生と連携の地域デザイン「歴史・エコ回廊」による地域再編 高橋賢一 ●インタビュー 人口減少時代を読み解く 2020年、東京はエッジシティになる?! 人口縮小社会と都市の変貌 松谷明彦/多角的な拠点づくりとアジア・ネットワーク 大西隆/「LIFE」から考える人口減少時代の都市像 大江守之 ●インタビュー 「KY」な日本のシュリンキング・シティ 瀬谷浩介 ●ケーススタディ シュリンキング時代の「地域資産活用術」—東京R不動産/黄金町バザール/東京コミュニティパワーバンク 		
No.91	特集「都市彩譜—まちのいろどりのふ」	(2009.3)
No.92	特集「fun town—たのしい・かわい・やさしいまちづくり」(2009.6)	
No.93	特集「マチとムラの幸福のレシピ」	(2009.9)
No.94	特集「創造のまちづくり」	(2009.12)
No.95	特集「団地ルネサンス」	(2010.3)
No.96	特集「風と土のインダストリー 地場産業の未来」	(2010.6)
No.97	特集「新しい公共交通—生活支援ネットワークへ—」	(2010.9)
No.98	特集「下北沢から「都市」を考える」	(2010.12) 在庫切れ
No.99	特集「「学校」からのまちづくり」	(2011.3)
No.100	特集「21世紀のまちづくり「情報革命が、都市をどう変えようとしているのか」	(2011.6)
No.101	特集「震災後の地域・コミュニティ・住まい—再生・復興への視点」	(2011.9)
No.102	特集「交流住宅—新しい暮らしのかたち」	(2011.12)
No.103	特集「時間に暮らす」	(2012.3)
No.104	特集「エリア・スタディ・シリーズ 地産地消エネルギーのまちづくり」	(2012.6)
No.105	特集「「町おこし」新潮流—地域に埋もれたコンテンツを発信する」	(2012.9)
No.106	特集「子どもの空間とまちづくり」	(2012.12) 在庫切れ
No.107	特集「シティホール—市庁舎の新潮流」	(2013.3)
No.108	特集「都市の〈隙間〉に集い、憩い、賑わう」	(2013.7)
No.109	特集「瀬戸内文化の再生 爺さま、婆さまを元気にする芸術祭」	(2013.11)
No.110	特集「都市とサイン」	(2014.3)
No.111	特集「自由が丘—暮らしやすさの秘密を探る」	(2014.7)
No.112	特集「新しいパートナーシップ—PPP>PFI> コンセッション方式」	(2014.11)
No.113	特集「新しい図書館」	(2015.3)

No.114	特集「空き家一家と暮らしと地域のこれから」	(2015.7)
No.115	特集「酒とまちづくり」	(2015.11)
No.116	特集「ロスト近代と都市の未来」	(2016.3)
No.117	特集「建築とまちづくり」	(2016.7)
No.118	特集「空き地カルチャー 多孔隙都市の可能性」	(2016.11)
No.119	特集「〈ゲストハウス〉的まちづくり」	(2017.3)
No.120	特集「ライフスタイルとしての「防災」」	(2017.8)
No.121	特集「夕方からのまちづくり」	(2017.12)
No.122	特集「これからの住まい・くらし—やわらかい都市へ」	(2018.4)
No.123	特集「みんなでつくり、みんなでつかう」	(2018.8)
No.124	特集「生まれ変わる街—渋谷・新宿・池袋」	(2018.12)
No.125	特集「オープンスペースからのまちづくり」	(2019.4)
No.126	特集「都市と木材」	(2019.8)
No.127	特集「カフェとまちづくり—心地よい空間と街並み」	(2019.12)
No.128	特集「クラウドファンディングで町を楽しく魅力的に」	(2020.4)
No.129	特集「都市の言説を巡る旅—8のキーワードから探る都市 [論] の現在2020」	(2020.8)
No.130	特集「コロナ後の都市と暮らし」	(2020.12)
<ul style="list-style-type: none"> ●連続インタビュー1 Afterコロナ、揺らぐ都市像 多彩で豊かな時間軸で、都市のあり方を変える 吉見俊哉/難接化と近隔化が進む都市のひとり空間 南後由和/—極集中からの解放と、あらゆる都市に求められる場 岸本千佳/われわれはすでにカストロロフィックな日常を生き始めている 酒井隆史 ●連続インタビュー2 Withコロナ時代の新しい暮らし 密集、異質性、流動性。都市の魅力を手放さないために 五十嵐泰正/豊かさの本質を問い直すことが地域再生の契機に 中橋恵/ムーブレスな働き方が、豊かな地域社会を実現する 大内伸哉 ●オンライン座談会 都市のしくみとくらし、これからの方向性 陣内秀信+大村謙二郎+小泉秀樹 ●連載 Let's Greening! 緑のまちづくり・8 江戸ルネサンス 伝統と文化が薫るおもてなし ●連載 子どもたちの「笑顔」に会いに行く・21 松の実こども園 ●連載 噂の「駅前」探検・8 新宿駅 今尾恵介・小夜小町・坂本政十 賜 		
No.131	特集「〈SDGs〉を考える—サステナブルな都市とは」	(2021.4)
<ul style="list-style-type: none"> ●対談 「誰もが暮らしやすい都市」とは何か 村上芽+大村謙二郎 ●連続インタビュー SDGs—環境・経済・社会 1.循環型社会における「緑」の可能性 横張真/2.持続可能な「成熟型まちづくり」への転換を目指す 諸富徹/3.気候変動危機、私たちにできること~SDGsの達成も視野に~ 足立治郎/4.自治体SDGs、オルタナティブな未来への実践 高木超/5.人間の集合としての都市、その未来への期待 武田重昭/6.SDGsと資本主義の未来 大澤真幸 ●連載 Let's Greening! 緑のまちづくり・9 地域の文化遺産の庭園を活用した交流と体験の広場 ●連載 子どもたちの「笑顔」に会いに行く・22 —妻保育園 ●連載 噂の「駅前」探検・9 渋谷駅 今尾恵介・小夜小町・坂本政十 賜 		
No.132	特集「まちとつながる〈エリアブックレット〉」	(2021.8)
No.133	特集「エリア・スタディ・シリーズ 〈エリア・スタディ・シリーズ〉その後」	(2021.12)
No.134	特集「〈SDGs〉を考える—サステナブルな都市とは— [実践編]」	(2022.4)
<ul style="list-style-type: none"> ●自治体SDGs 持続可能な地域の未来像とは 松尾崇×高木超 ●ケーススタディ 誰もが安心して暮らし続けられる町へ 地方創生を推進する「SDGs未来都市」 1.神奈川県鎌倉市 「共創」をキーワードに、なりたい未来を実現する—持続可能な都市経営「SDGs未来都市かまくら」の創造/2.京都府亀岡市 アートプロジェクトをハブとして、環境保護からSDGsの輪を広げる「かめおか霧の芸術祭」×X/3.岡山県英田郡西栗倉村—100年後を見据えて、村の資源としての森林を100%活用する—森林ファンドと森林RE Design!による百年の森林事業Ver.2.0/4.福井県鯖江市 GOAL No.5「ジェンダー平等」はすべての基本—持続可能ながねのまちさばえ~女性が輝くまち~ ●連載 Let's Greening! 緑のまちづくり・12 農家の庭に学ぶ「持続可能な都市ガーデン」 京都府亀岡市 ●連載 子どもたちの「笑顔」に会いに行く・25 西田地方保育園 ●連載 噂の「駅前」探検・12 鎌倉駅 今尾恵介・小夜小町・坂本政十 賜 		

財団が発行した調査研究報告書

当財団では助成した研究について、その成果である調査研究報告書を発行しています。
ここ1年間に発行したものをご紹介します。

一般研究	魅力ある郊外での暮らしに関する研究 —イギリスの事例からまちづくりの担い手と住人の課題を探る— 石見豊 (国土舘大学政経学部・教授)
	子どもが感じている「将来の子育て像」に基づいた都心居住環境の評価 —TokyoとSeoulを対象として— 丹羽由佳理 (東京都市大学環境学部・准教授) 他
	大学街およびその生活環境の歴史的形成・変化に関する日欧比較 —ベルギー・ルーヴェンと日本・早稲田を中心として— 真辺将之 (早稲田大学文学学術院・教授)
	社会的不利地域の居住支援にかんする国際比較研究—東アジアにおける「寄せ場型地域」を中心に— 全泓奎 (大阪市立大学都市研究プラザ・教授) 他
	生活圏における社会資源・空間資源・私的關係資源の相互関係の類型化 —防災に活用できるパターン・ランゲージの提案— 黒石いずみ (青山学院大学総合文化政策学部・教授) 他
	再生可能エネルギー事業収益の創出による都市インフラの持続可能な維持管理 —「日本版シュタットベルケ」の研究— 諸富徹 (京都大学大学院経済学研究科・教授) 他
奨励研究	北海道ニセコ地域における外国人居住者の生活実態と広域まちづくり計画 野村理恵 (北海道大学大学院工学研究院・准教授)
	鞆の浦における町並み保存型まちづくりの展開過程 —住民による町並み保存の継承と制度への展開— 松井大輔 (新潟大学工学部・准教授) 他
	超高齢社会における身体機能変化対応型住宅に関する研究～QOLや転倒恐怖感に着目して～ 上田哲也 (大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科・助教)
	環境影響評価の理論を活用した地方自治体の環境会計のあり方に関する研究 山崎潤也 (東京大学大学院工学系研究科・特任研究員)
	「都市をとかず」ための空き空間の情報共有の促進に向けた「空き地図」ワークショップの可能性 坂本慧介 (東京大学大学院工学系研究科・助教) 他

(応募受付順。肩書は当時のもの。敬称略)

調査研究報告書をご希望の方には一部2,000円でお頒けしますので、当財団までご連絡願います。
過去の調査研究報告書についてはホームページ(次頁にアドレス)にテーマ、研究者名および要旨等を掲載しています。

第一生命財団について

第一生命財団は、第一生命保険相互会社(現第一生命保険株式会社)からの拠出金をもとに設立された都市のしくみとくらし研究所、地域社会研究所および姿勢研究所が、2013年4月1日付で合併し発足した一般財団法人です。

当財団は、豊かな次世代社会の創造に寄与することを目的として、少子高齢化社会において、健康で住みやすい社会の実現に向けた調査研究ならびに提案、助成等を行っています。具体的には、これまで取り組んできた「都市とくらし」「コミュニティ」「姿勢と健康」に関する調査研究と啓発活動に加え、社会的に喫緊の課題である「待機児童対策」の一助となるべく、新設の保育所(認定こども園を含む)に対する助成事業および緑豊かな住環境の整備のための都市緑化に関わる助成事業「都市の緑3表彰」に取り組んでいます。

●ホームページ <http://group.dai-ichi-life.co.jp/dai-ichi-life-foundation/>

購読のご案内

年3回(4月・8月・12月)発行、頒価500円+送料実費

定期購読は諸般の事情により受付を終了しました。毎号内容(PDF)をホームページに掲載いたしますので、そちらをご覧ください、ご希望の号をお求め願います。

city@life no.135 Aug.-Nov.2022

2022年8月発行

企画委員	日端康雄 (慶應義塾大学名誉教授) 陣内秀信 (法政大学特任教授) 大村謙二郎 (筑波大学名誉教授) 小泉秀樹 (東京大学教授) 木下庸子 (工学院大学教授・設計組織ADH代表) 盛田里香 (第一生命財団常務理事) 佐藤 真 (株式会社アルシーヴ社)
編集・発行	一般財団法人 第一生命財団 東京都千代田区平河町1丁目2番10号平河町第一生命ビル2階 電話03-3239-2312
編集協力	株式会社アルシーヴ社 斎藤夕子 杉山 衛
デザイン・レイアウト	生沼伸子
印刷	株式会社エイチケイグラフィックス 頒価500円+送料実費

